中央系部門のご案内

麻酔部（ペインクリニック）

□ 診療内容

通常の治療では軽減しない難治性の疼痛疾患に対して、神経ブロック、薬物療法、東洋医学（漢方療法、鍼治療）、光線療法、手術療法などによって治療を行っています。また、神経ブロックは疼痛疾患ばかりではなく、顔面神経麻痺、特発性難聴、顔面痙攣、多汗症といった非疼痛性機能性疾患や末梢循環障害をきたす疾患（動脈閉塞、バージャー病、レイノー症候群など）にも非常に有用です。

【診療体制】

診療時間：毎週月曜日～土曜日の午前（11：00までに受付をお願いしております。）

毎週土曜日の8：30AMから外来でのカンファレンスを行っています。

【主な外来診療責任者】

濱口（はまぐち） 眞輔（しんすけ）	教 授：水曜日	山下（やました） 雄介（ゆうすけ）	医 員：木曜日
山口（やまぐち） 重樹（しげき）	教 授：金曜日	知野（ちの） 諭（さとる）	医 員：月曜日
木村（きむら） 嘉之（よしゆき）	准教授：月曜日	山中恵里子（やまなかえりこ）	医 員：金曜日
高薄（たかすすき） 敏史（としふみ）	准教授：不定期	阿久津和也（あくつかずや）	医 員：火曜日
篠崎（しのざき） 未緒（みお）	講 師：火-金曜日	清水（しみず） 貴仁（たかひと）	医 員：木曜日
髙橋（たかはし） 良享（よしゆき）	講 師：金曜日	人見（ひとみ） 俊一（しゅんいち）	医 員：月曜日
寺島（てらしま） 哲二（てつじ）	講 師：金曜日	福田（ふくだ） 裕也（ゆうや）	医 員：金曜日
白川（しらかわ） 賢宗（けんしゅう）	講 師：月-木曜日	長岡（ながおか） 諒（りょう）	医 員：火曜日
國分（こくぶ） 伸一（しんいち）	講 師：水曜日	塙（はなわ） 宏基（ひろき）	医 員：火曜日
沼田（ぬまた） 祐貴（ゆうき）	講 師：木曜日	小林（こばやし） 泰知（たいち）	医 員：木曜日
佐藤（さとう） 雄也（ゆうや）	医 員：火曜日	長田（おさだ） 舞奈（まいな）	医 員：水曜日
小松崎（こまつざき） 誠（まこと）	医 員：水曜日	舘田（たてだ） 賢一（けんいち）	医 員：月曜日
櫻井（さくらい） 秀嵩（ひでたか）	医 員：木曜日	椎名（しいな） 真由（まゆ）	医 員：月曜日
丸山（まるやま） 耕平（こうへい）	医 員：水曜日	森（もり） 純一郎（じゅんいちろう）	医 員：金曜日

【主な対象疾患】

○腰痛症（急性腰痛、変形症腰痛症、腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症など）
○頚椎症（変形性頚椎症、頚椎椎間板ヘルニアなど）
○難治性疼痛（脊椎手術後難治性疼痛　など）
○三叉神経痛　○原因不明の顔面痛（非定型顔面痛）
○帯状疱疹による痛み、帯状疱疹後神経痛
○外傷性頚部症候群（むちうち損傷），複合性局所疼痛症候群（カウザルギア、反射性交感神経萎縮症）
○頭痛（偏頭痛、緊張性頭痛、群発頭痛）　○肩関節周囲炎
○肋間神経痛　○がん性疼痛
○末梢循環障害をきたす疾患（閉鎖性動脈硬化症、バージャー病、レイノー症候群など）
○顔面神経麻痺　○特発性難聴　○顔面痙攣　○多汗症

□ 特徴・特色

●各曜日ともペインクリニック専門医の資格を有した教授・准教授・講師を中心に、4-5名のスタッフが診療にあたっております。
●外来通院による治療を基本とします。
超音波ガイド下やX線透視下で行う必要がある高度な神経ブロック、手術療法（脊髄刺激療法など）は入院加療となります。
●当院は地域がん診療連携拠点病院に指定されており、麻酔部では、緩和ケア部門を担当して院内外から紹介いただくがん疼痛の患者さんの痛み緩和に取り組んでおります。

□ その他

特に紹介していただきたい疾患と治療方法・治療成績

○腰椎症、頚椎症：各種神経ブロックによる痛みの緩和が可能です。また、高周波治療法を用いることで、長期的な痛みの緩和を得ることも可能となります。
○帯状疱疹・帯状疱疹後神経痛：外来でのブロック療法、薬物療法で90％以上の患者さんが疼痛軽減を得ています。また、激痛の場合には入院にて神経ブロックを行います。（発症後の早期に痛みを緩和することで、疼痛の残存が少なくなる可能性が上がります。）
○三叉神経痛：高周波熱凝固や神経破壊薬を用いたブロックを行った場合、80％以上の患者さんが半年から1年ごとのブロックを行うのみで疼痛管理が可能となります。（場合により入院加療）
また、内服薬による治療も行っております。
○複合性局所疼痛症候群：交感神経機能異常による痛みであれば、交感神経ブロックによって痛みが軽減します。
○難治性疼痛：難治性疼痛（難治性の術後痛や神経炎）に対して、各種神経ブロックや脊髄刺激療法を行っています。
○末梢血行障害：神経ブロックや脊髄刺激療法によって90％以上の方に症状の改善がみられております。
○がん性疼痛：麻薬性鎮痛薬、鎮痛補助薬、神経ブロックなど用いて、包括的ながん疼痛治療を行っています。特に、内臓神経ブロックなどの特殊な治療を行うことで鎮痛薬の使用量を抑えることが可能となります。

主な医療設備

サーモグラフィー、脳血流シンチグラム、高周波熱凝固装置、各種理学療法機器、組織酸素飽和度測定器

高度医療

○高周波熱凝固法：長期間の神経ブロック効果が期待できます。
○脊髄刺激療法：あらゆる薬物に抵抗性の難治性疼痛に対して脊髄刺激療法を行い、長期の鎮痛が得られます。
○経皮的硬膜外癒着剥離術（Raczカテーテルによる治療）：脊椎術後の難治性疼痛の緩和に有用です。
○ボツリヌス毒素療法：眼瞼痙攣、顔面痙攣、腋窩多汗症，痙性斜頚の症状緩和に有用です。
○硬膜外カテーテル埋め込め術：硬膜外カテーテルを体内に埋め込み、がん疼痛患者の在宅療養を可能にします。
○脊椎疾患に対する各種椎間板治療（経皮的椎間板治療）

診療部長　濱口（はまぐち）　眞輔（しんすけ）
山口（やまぐち）　重樹（しげき）

医局長　髙橋（たかはし）　良享（よしゆき）

外来医長　篠崎（しのざき）　未緒（みお）

病棟医長　白川（しらかわ）　賢宗（けんしゅう）

外来受付電話番号　0282-87-2213

□ スタッフと専門領域

氏名	職名	専門分野	特に専門とする領域	専門医
濱口（はまぐち）　眞輔（しんすけ）	教　授	ペインクリニック	脊椎難治性疼痛、神経ブロック、手術療法（脊髄刺激療法）、薬物療法、漢方療法	＊1 ＊2 ＊3
山口（やまぐち）　重樹（しげき）	教　授	ペインクリニック	緩和ケア（がん疼痛治療）、慢性疼痛、薬物療法	＊1 ＊2 ＊4
木村（きむら）　嘉之（よしゆき）	准教授	ペインクリニック	神経ブロック、認知行動療法、運動療法	＊1 ＊2
髙薄（たかすすき）　敏史（としふみ）	准教授	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	＊1 ＊2
髙橋（たかはし）　良享（よしゆき）	准教授	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック、手術療法	＊1 ＊2
篠崎（しのざき）　未緒（みお）	講　師	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック、手術療法（脊髄刺激療法、経皮的椎間板治療）	＊1 ＊2
白川（しらかわ）　賢宗（けんしゅう）	講　師	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック、緩和ケア（がん疼痛治療）	＊1 ＊2 ＊4
寺島（てらしま）　哲二（てつじ）	講　師	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック、漢方療法	＊1 ＊2
國分（こくぶ）　伸一（しんいち）	講　師	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック、手術療法	＊1 ＊2
沼田（ぬまた）　祐貴（ゆうき）	講　師	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック、手術療法	＊1 ＊2
佐藤（さとう）　雄也（ゆうや）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	＊1 ＊2
小松崎（こまつざき）　誠（まこと）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	＊1 ＊2
山下（やました）　雄介（ゆうすけ）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	＊1 ＊2
知野（ちの）　諭（さとる）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	＊1 ＊2
山中恵里子（やまなかえりこ）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック、緩和ケア（がん疼痛治療）	＊1 ＊2
阿久津和也（あくつかずや）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	＊1
清水（しみず）　貴仁（たかひと）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	＊1
人見（ひとみ）　俊一（しゅんいち）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
福田（ふくだ）　裕也（ゆうや）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	＊1
長岡（ながおか）　諒（りょう）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
塙（はなわ）　宏基（ひろき）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
小林（こばやし）　泰知（たいち）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
長田（おさだ）　舞奈（まいな）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
舘田（たてだ）　賢一（けんいち）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
櫻井（さくらい）　秀嵩（ひでたか）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
椎名（しいな）　真由（まゆ）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
丸山（まるやま）　耕平（こうへい）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	
森（もり）　純一郎（じゅんいちろう）	医　員	ペインクリニック	疼痛疾患一般、神経ブロック	

＊各医師の担当曜日等は、別紙「外来曜日別診療医一覧表」でご確認ください

＊1：日本麻酔科学会認定麻酔専門医
＊2：日本ペインクリニック学会認定ペインクリニック専門医
＊3：日本東洋医学会認定漢方専門医
＊4：日本緩和医療学会認定緩和医療専門医

認知症疾患医療センター

□ 診療内容

高齢化社会の到来に伴って認知症の患者さんは急激に増加しており、認知症の患者数は2012年には460万人とされていましたが、2020年には600万人を超え、2025年には700万人近くとなり、65歳以上の5人に一人が認知症という状況となると推計されています。とりわけ過半数を占めるといわれるアルツハイマー病は最初「もの忘れ」から始まり、記憶、思考、理解、判断などの知的作業障害の他に、感情、行動、性格の変化などの精神症状が出てきます。アルツハイマー病は早い段階で気づかれることによって、その進行を薬物療法によって遅らせることが可能になってきています。また「もの忘れ」は自覚しているが、日常生活には支障はない人たちでも将来高率に認知症に進行することが明らかになっています。そのため、おかしいなと思った方は「年齢のせい」という先入観を捨てて、少しでも早く専門医の診断を受けることが大切です。本センターは県から指定されて獨協医科大学病院に設置されたもので、以下の相談・診療業務を行っています。

●専用電話：0282－87－2251によりご家族・ご本人からの電話相談に応じます（無料）pm 2:00～pm 4:00
●ご家族・ご本人の直接の来所相談に応じます。
●医療機関・福祉施設・市町村などからの専門医療相談に応じます。
●年齢を問わず「もの忘れ」を自覚されている方々、あるいは年齢のせいかと思われている方々の診断を行います（各種健康保険使用・有料）。診察は精神神経科外来、あるいは神経内科外来で行います。特に神経内科外来には「物忘れ外来」を設置し、認知症の鑑別診断と治療方針の選定を行っています。まだ市販されていない治験薬も、患者さんの症状により、またご家族の同意などをいただける場合に使用することも可能です。
●中等症以上の方で適応がある方には精神神経科病棟での入院加療をおこないます（各種健康保険使用・有料）。
●認知症との見分けが困難なうつ病、意識障害（せん妄）の診断と治療も行います（各種健康保険使用・有料）。

【主な対象疾患】
○アルツハイマー病（若年性アルツハイマー病を含む）
○レビー小体病
○血管性認知症
○その他の認知症性疾患
○老年期（血管性）うつ病

□ 特徴・特色

診療活動

正常な加齢による「もの忘れ」なのか、認知症なのか、認知症に類似していても治療できる疾患なのかを見極めること、また認知症をいかに早期から治療していくかは、個々の患者さんの経過、介護の方針に大きく影響します。特に認知症の中で大きな比重を占めるアルツハイマー病の早期診断と治療導入に力を入れています。介護者の相談に応じ、介護者を支援します。医療機関・福祉施設・市町村と連絡をとり患者さんの処遇を検討します。

認知症疾患医療センターとしての活動

市民と看護師・介護士・ケアマネージャーを対象に研修会を開催します。

連携病院を含めた医療連携協議会を開催します。

公開講座・講演会を定期的に開催し、認知症に対する啓蒙活動を行っています。

センター長　古郡（ふるごおり）　規雄（のりお）

副センター長　鈴木（すずき）　圭輔（けいすけ）

副センター長　渡邉（わたなべ）　由佳（ゆか）

外来受付電話番号　0282-87-2251

□ 業務体制

【相談時間】

月曜日～金曜日	pm2:00 ～ pm4:00

【診療受付時間】

完全予約制です。ただし、脳神経内科の「物忘れ外来」は火曜・水曜・金曜（pm 2:00 ～ pm 4:00）で完全予約制です。

スタッフ（いずれも兼務）

医師	6名
看護師	4名
臨床心理士	3名
医療ソーシャルワーカー	13名

□ その他

実績

2021年度実績

相談事業	2027件
ケースワーク事業	1704件
もの忘れ外来（神経内科）	482件

獨協医科大学認知症疾患医療センター主催講演会実績および予定

2013年11月2日（土）
　城戸真亜子先生（画家、タレント）
　「心をつなぐ介護日記」
2014年8月30日（土）
　小坂憲司先生（横浜市立大学医学部名誉教授）
　「認知症の臨床と介護」
2015年10月31日（土）
　長谷川和夫先生（認知症介護研究・研修東京センター
　名誉センター長
　聖マリアンナ医科大学　特別顧問）
　「認知症の正しい理解」
2016年10月29日（土）
　砂川啓介先生（俳優）
　「君は一人ぼっちじゃない
　－You'll never walk alone－」
2017年8月26日（土）
　新井平伊先生（順天堂大学大学院医学研究科
　精神・行動科学　教授）
　「認知症と診断されても人生終わりじゃない！」
2018年10月13日（土）
　荒井由美子先生（国立長寿医療研究センター
　長寿政策研究部　部長）
　「認知症高齢者の自動車運転を考える
　～認知症高齢者の安全と安心のために～」
2019年10月5日（土）
　綾戸智恵先生（ジャズシンガー）
　「家族との関わり　～母として・娘として～」
2020年12月
　古郡規雄先生（獨協医科大学精神神経医学講座　准教授
　獨協医科大学認知症疾患医療センター
　副センター長）
　「認知症を知る」（on demand配信）
2021年9月
　ダイアモンド☆ユカイ先生（歌手）
　高齢者運転に関するテーマで下田センター長と対談
　（on demand配信）
2022年12月
　橋本衛先生（近畿大学医学部精神神経科学教室）
　「認知症医療の過去・現在・未来」（on demand配信）

総合周産期母子医療センター

□ 特徴・特色

当センターは厚労省の定めた施設基準に適合し、栃木県知事が認定した総合周産期母子医療センターとして1997年1月に発足しました。全国の総合周産期母子医療センターの草分けとして、栃木県内はもとより茨城県、群馬県、埼玉県、福島県の周産期施設からも母体・新生児の搬送依頼を受けております。

センターは隣接した産科部門と新生児部門から構成されており、産科部門は母体･胎児集中治療管理室（MFICU）6床、後方病室28床、計34床、新生児部門は新生児集中治療管理室（NICU）12床、後方病室27床、計39床を擁しております。医師は計9名の専任スタッフ（産科部門4名、新生児部門5名）に加えて、産科部門は産婦人科医局から、新生児部門は小児科医局からそれぞれローテイトが組まれ産科部門8名、新生児部門8名の常勤医師が勤務しております。

□ 診療内容

総合周産期母子医療センターの定義に基づき、常時母体、新生児を受け入れる体制を有し、合併症妊娠、重症妊娠高血圧症候群、切迫早産、多胎妊娠、胎児異常など母体または児におけるリスクの高い妊娠に対する医療、及び高度な新生児医療等の周産期医療を行っています。

産科部門では、妊娠22週以降から妊娠26週までの早産を極力防止することを目標にしておりますが、やむをえず出産に到る場合には、国内外の最新のデータに基づき、最善な時期・方法で児を娩出する努力を行っております。さらに母児に緊急事態が発生した場合には、手術部・麻酔部の協力により、帝王切開を決定後30分以内に児を娩出できる体制を整えております。胎児以上についてはエコーやMRなどを駆使して診断を行い、新生児部門や関係各科との連携のうえ、治療方針を検討しています。

また、新生児部門では保育器および人工呼吸器を豊富に揃え、どのような疾患に対しても集中治療が可能な体制を整えております。早産低出生体重児はもとより、呼吸障害やチアノーゼを呈する正期産児、外科疾患、脳外科疾患、様々な先天異常児も含めて、新生児に出現するあらゆる疾患を対象にしています。外科系の疾患児に対しては、新生児専門の小児科医師と外科医がチームを組んで診療に当たっています。また、重症呼吸障害に対する高度医療である一酸化窒素吸入療法、低酸素性虚血性脳症に対する低体温療法を導入し、成果を上げております。

さらに両部門とも死産・新生児死亡となった両親に対するグリーフケアに力を入れております。また染色体異常や遺伝性疾患などに対する遺伝相談外来を設けて、積極的に対応しております。

また、当センターでは臨床心理士が常駐しております。早産・低出生体重で出生した児や、様々な先天異常を有した児のご両親（特に母親）に対する心理カウンセリングは、現在の周産期医療に欠かせないものになっております。臨床心理士が早期から関わることにより母親への心理的援助を行い、よりよい母児関係を築くことを目標としております。

さらに当院ではNICUのみでなく、産科病棟での出生前からのカウンセリングも始めております。

□ 治療および成績

2023年に当センターに入院した母子のうち、救急母体搬送は102件、ハイリスク妊婦の紹介は約430名、新生児搬送は85名でした。

産科部門からの新生児部への入院患者は218名、うち205名が母体搬送ないし外来紹介妊婦からの出生児でした。1000g未満の生存率は、88％（18名中16名）でした。1000～1499gの生存率は前年と同じく100％（16名中16名）でした。

母体・新生児とも、経過良好でNICU管理を必要としなくなった場合には、センター機能を有効に活用するためにも、紹介元の施設に妊婦や新生児の逆搬送（back transfer）を行っております。ただし、状態の安定しない妊婦や新生児を、ベッドの都合で他施設に転院させることは決してありません。

両部門ともベッドを調整して、できる限り搬送のご依頼をお受けするようにしておりますが、どうしても空床がなくお受けできないことがあります。万が一当院でお受けできない場合には他施設と連絡をとり、入院先を確保致します。2008年4月に発足した栃木県周産期連携医療センターの集計によりますと、県内施設から搬送依頼のあった妊婦さんの99％以上が、栃木県内の周産期施設に入院できておりました。

なお、緊急の搬送依頼はできる限りお受けしますが、母体の場合、緊急母体搬送以外にも、急を要しない場合ハイリスク妊婦の外来紹介を考慮していただけると幸いです。個々の妊婦・新生児の症状により、先生方が当センターでの治療が望ましいと判断された場合には、下記までご連絡下さい。また、「入院するほどではないが、わからないことや迷うことがある」という場合も、ご相談に応じます。

24時間、365日、いつでも対応が可能です。

センター長　柴田（しばた）　英治（えいじ）

産科部門長　成瀬（なるせ）　勝彦（かつひこ）

実務責任者（産科部門）　多田（ただ）　和美（かずみ）

新生児部門長　渡部（わたべ）　功之（よしゆき）

電話番号　母体搬送　0282-87-2218
新生児搬送　0282-87-2217

□ ご紹介頂く医療機関のみなさまへ

入院の御連絡は

母体搬送：０２８２－８７－２２１８
新生児搬送：０２８２－８７－２２１７
にお願い致します。

また救急車搬送の場合、救急隊から受け入れ確認の電話が集中治療部（ICU）に繋がり、混乱することが時々あります。当センターからも各消防署にお願いしておりますが、救急車出動依頼時に上記の電話番号をお伝えいただければ幸甚に存じます。

FAXは

産科部門：０２８２－８７－２０６８
新生児部門：０２８２－８６－７４９９
です。

産科外来へのハイリスク妊婦の御紹介は、常時可能です。詳細は産婦人科の案内をご参照下さい。

毎年２回春と秋に栃木県周産期医療研修会を開催しています。

県からの委託事業でもありますので、諸先生方のご参加をお待ちしております。

□ 当院を受診希望の妊婦の皆様へ

当科を受診される方は、**紹介状のご持参をお願いしておりますので**、ご協力をよろしくお願いいたします。

なお、当院は総合周産期母子医療センターのため、ハイリスク妊娠を優先的に診療しております。

そのため**紹介状をご持参された方でも、ローリスク妊娠と判断された場合は、適切な産科施設へご紹介させて頂く場合があります**ので予めご了承下さい。

詳細は産婦人科外来へお問い合わせ下さい。ご協力の程を宜しくお願い致します。

産婦人科外来受付

電話受付時間：平日14:00～16:00
電　話：（０２８２）－８７－２２１１（直通）

とちぎ子ども医療センター

□ とちぎ子ども医療センターについて

当センターは、栃木県が策定した「栃木県小児医療整備構想（2002年3月）」に基づき、小児医療の専門施設として2004年4月に当院に設置されました。

新館の南側に小児医療の機能を集約した新棟（1階：小児外来、3階：小児病棟）を設置し、子どもの様々な疾患に対応するため、各診療分野にエキスパートを揃えております。

子どもに多い一般疾患の他にアレルギー・呼吸器疾患、血液腫瘍疾患、神経・精神疾患、内分泌代謝疾患、腎・泌尿器疾患、未熟児・新生児疾患などに対して専門医師の配置や高度な医療機器の設置等を行うことにより、高度な専門治療を行っております。

□ 高度専門医療機能の整備

1. 造血幹細胞移植（Hematopoietic Stem Cell Transplantation）ユニットや無菌室の整備、専門医の配置等により、血液・腫瘍疾患等への高度な治療環境を整備しています。
2. 親子一体となった診療等患児・家族の個別診療のための個室整備や専門医の配置等により、アレルギー・呼吸器疾患等への高度な治療環境を整備しています。
3. 呼吸管理が必要な患児等のため病床や高度な医療機器の整備など各種の高度専門医療機能の充実強化を図っております。

□ 周産期医療・成人医療と連携した成育医療機能の充実

乳幼児期から思春期までの小児医療環境の充実強化を図り、大学病院における周産期医療や成人医療との連携を強化することにより、胎児から小児、思春期を経て成人、妊娠に至る子どもの成育サイクルにおいて、継続的かつ総合的な医療を提供する成育医療機能の充実を図っています。

□ 小児の三次救急医療機能への迅速な対応

救命救急センターと一体的な整備を図ることにより、初期・二次救急医療機関において対応が困難な重篤な患児に迅速に対応しています。

□ 子どもや家族の視点に立ったQOLの向上と患児の育成に対する支援機能

1. 患児の育成に対する支援機能
   療養中も子どもが成長していく過程の一つと考え、子どもにとって不可欠な教育や遊びができる院内教室やプレイルームの整備、家族も含めた心のケアを行う臨床心理士の配置等により、患児に対する総合的な育成支援機能を整備しています。
2. 家族に対する支援機能
   家族と協力した医療の提供や家族からの相談等に対応する面談室・指導室の整備による家族に対する支援機能を整備しています。
   また、センター施設外における、長期入院患児等の付添家族の負担を軽減するための宿泊施設として、敷地内にある「ホスピタルイン獨協医科大学」が利用可能です。
3. 快適な療養環境の整備
   センターは、治療の場であるとともに生活の場でもあることから、子どもが快適に過ごすことができるよう、子どもに親しみやすい色彩やサイン、空間の整備など患児と家族の満足度の高い療養環境を整備しています。

□ 各診療科における子ども医療センターでの特徴・特色など

小児科

小児科の診療体制は専門性が分かれておりますが、小児科は子どもの全体像を見なくてはならない診療科であるとの認識を持ち、さらに子どもの健全な成長発達を視点におき、患者さんやご家族の立場に立った全人医療を目指しています。

小児外科

小児外科では、新生児外科疾患、小児消化器疾患、一般小児外科疾患、小児悪性腫瘍、小児救急に対応しています。また侵襲の低減を目的に細径腹腔鏡を用いた鏡視下手術を行っています。

脳神経外科

脳神経外科では、脳や脊髄に起こる様々な疾患や外傷の治療を行っています。脳腫瘍、水頭症、もやもや病、てんかん、二分脊椎、頭部外傷など多様な病態に各分野の専門家が対応しています。

整形外科

特発性側弯症→全国的にも多い
外傷（骨折など）

耳鼻咽喉・頭頸部外科

耳鼻咽喉・頭頸部外科では、全般にわたり広く診察を行っております。特に小児においては、アレルギー性鼻炎を含む鼻副鼻腔疾患、中耳疾患、小児難聴、睡眠時無呼吸症候群など各分野専門外科を設けて対応しております。

口腔外科

口腔外科は小児の外傷や先天性疾患の治療をおこなっています。また口腔は呼吸器、消化器の一部であるため、呼吸状態の管理、経口摂取不足による脱水などに注意しながら、周術期管理を行っています。

形成外科・美容外科

形成外科・美容外科では身体に生じた組織の異常や変形、欠損、あるいは整容的な問題に対してあらゆる手法や特殊な技術を駆使して治療を行っております。機能のみならず形態的にもより正常に、より美しくすることによってQOLの向上に貢献していく診療科です。

放射線科

安全で質の高い画像検査を行い、画像診断を小児疾患の早期診断、治療に役立てる。

リハビリテーション科

リハビリテーション科では小児のリハビリテーション治療、装具、バギーの作製、脳性麻痺に対するボツリヌス毒素による治療を行っています。

救急・集中治療科

救急・集中治療科は、救急搬送となった内因性急性期疾患や外傷、入院中の重症化した患者様方の診療を担っています。小児領域の専門スタッフとともに、より良い診療環境を患児に提供します。

泌尿器科

精索捻転、尿路感染症、精索静脈瘤、停留精巣などの診療を行っております。

精神神経科

精神神経科では、全般にわたり広く診察を行っております。特に摂食障害に力をいれております。

センター長　白石　秀明
外来医長　今高　城治
病棟医長　佐藤　雄也

外来受付電話番号　0282-87-2201

□ スタッフ

担当科	氏名	職名	専門分野
小児科	白石　秀明	教　授	小児科一般、小児神経学、てんかん、脳波、脳磁図
	今高　城治	准教授	小児科一般、てんかん、小児神経、障害児医療、臨床遺伝、感染症
	佐藤　雄也	准教授	小児科一般、血液、腫瘍
	※小児科のスタッフについては、P31「小児科」のページをご参照下さい。		
小児外科	鈴木　完	准教授	一般小児外科、新生児外科、小児悪性腫瘍、小児泌尿器疾患
	畑中　政博	助　教	一般小児外科、小児消化器疾患
	荻野　恵	助　教	一般小児外科、小児消化器疾患
脳神経外科	阿久津博義	教　授	脳腫瘍、下垂体・頭蓋底腫瘍
	黒川　龍	准教授	脊髄腫瘍、脊髄奇形、水頭症
	池田　剛	講　師	脳血管障害、血管内治療
整形外科	種市　洋	教　授	先天性側弯
	瓜田　淳	講　師	小児スポーツ障害
	中山健太朗	講　師	小児上肢外傷、先天性奇形
耳鼻咽喉・頭頸部外科	中山　次久	教　授	鼻副鼻腔疾患、上気道疾患
	平林　秀樹	特任教授	気管食道疾患、頭頸部腫瘍疾患、喉頭疾患、甲状腺疾患
	深美　悟	教　授	中耳疾患、小児難聴
口腔外科	川又　均	教　授	唇顎口蓋裂、小児口腔外科
	和久井崇大	准教授	唇顎口蓋裂、小児口腔外科
	小宮山雄介	講　師	唇顎口蓋裂、小児口腔外科
形成外科・美容外科	飯田　拓也	教　授	瘢痕拘縮、良性腫瘍、熱傷
	梅川　浩平	講　師	瘢痕拘縮、良性腫瘍、熱傷、眼瞼疾患、血管腫、リンパ管腫
	倉林　孝之	講　師	小児先天奇形
	中村　佑紀	助　教	小児形成外科全般
放射線科	桑島　成子	准教授	全般
リハビリテーション科	美津島　隆	教　授	リハビリテーション科一般、脳性麻痺、発達遅滞
	入澤　寛	准教授	リハビリテーション科一般、脳性麻痺、発達遅滞
	中村　智之	講　師	リハビリテーション科一般、脳性麻痺、発達遅滞
救急・集中治療科	佐久間大智	助　教	救急・集中治療全般
泌尿器科	釜井　隆男	教　授	全般
	木島　敏樹	講　師	全般
	武井　航平	助　教	全般
精神神経科	古郡　規雄	教　授	精神科全般
	折目　直樹	非常勤助教	児童精神医学

消化器内視鏡センター

センター長　郷田（ごうだ）　憲一（けんいち）

外来受付電話番号　0282-87-2192（消化器内科）
内視鏡室連絡番号　0282-87-2183

□ 特徴・特色

当センターは消化器内視鏡に関連する各診療科（消化器内科、健診センター、血液･腫瘍内科、上部消化管外科、肝･胆･膵外科、耳鼻咽喉・頭頸部外科）の医師と看護師、看護助手が協力し、日々の検査および治療にあたっています。日本消化器内視鏡学会、日本レーザー医学会、日本カプセル内視鏡学会の指導施設として認可を受けており、先端機器を駆使して指導医、専門医を中心に高度な内視鏡診療を行っております。また、各種マニュアルを作成し、患者さんにとって安全で苦痛のない検査ができるように、日々努力をしております。

□ 診療概要

当センターでは、上部・下部消化管内視鏡検査（年間約1万2千件）をはじめとして、膵・胆道内視鏡検査、小腸内視鏡検査、カプセル内視鏡検査などを積極的に行っております。最先端の機器と技術を用いて、診断から治療まで幅広く対応しております。

具体的な内視鏡検査、治療の内容

1）消化管疾患に対する検査、治療（年間約9,000件）

・画像強調・拡大内視鏡検査
NBI、BLI/LCIといった画像強調内視鏡と、拡大内視鏡を組み合わせて、早期癌の発見から質的診断、範囲診断および深達度診断などを行っております。

・内視鏡的粘膜切除術（EMR）（年間約530件）、内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）（年間約250件）、内視鏡的咽喉頭手術（ELPS）（年間約30件）
食道、胃、十二指腸、大腸の早期癌などを中心にEMRやESDといった内視鏡的切除を行っています。最近では病変を確実に一括切除できるESDの件数が飛躍的に増加しています。また、耳鼻咽喉科・頭頸部外科と合同で、咽喉頭表在癌に対するELPSを行っており、失声（声を失うこと）させることなく、表在癌を切除することに取り組んでいます。

・光線力学療法（PDT）
腫瘍親和性光感受性物質を静脈内投与後、レーザーを腫瘍に照射し、腫瘍を選択的に破壊する内視鏡治療です。食道癌では化学・放射線治療後の遺残、再発病変に対しても適応があります。

・食道静脈瘤に対する内視鏡治療（年間約200件）
内視鏡的静脈瘤結紮術（EVL）や内視鏡的静脈瘤効果療法（EIS）などを多数施行し、治療効果を上げています。

・バルーン小腸内視鏡検査（年間約250件）、カプセル内視鏡検査（年間約150件）
かつて検査が困難であった小腸疾患に対して、バルーン小腸内視鏡検査、カプセル内視鏡検査を行っています。これらによって小腸内出血や腫瘍を診断し、さらに止血や生検といった処置を行うことが可能です。クローン病の小腸病変に対する診断、治療も可能となっています。

・消化管ステント挿入術
根治の可能性がない高度進行癌による狭窄や穿孔症例を中心としてステント挿入を行っており、経口摂取が可能になることでQOLの向上に努めています。

・超音波内視鏡検査および治療（年間約550件）
食道、胃、大腸の消化管腫瘍だけでなく、膵・胆道系腫瘍に対しても積極的に超音波内視鏡検査を施行しています。これによって腫瘍を詳細に観察し、局在や深達度の診断を行うのみならず、近年では超音波内視鏡下穿刺吸引法による生検で確実な組織診断が行えるようになり、施行件数が急激に増えています。また超音波内視鏡下の膵仮性嚢胞ドレナージなども行っています。

2）膵・胆道内視鏡検査および治療（年間約1000件）
側視鏡を用いて膵・胆道疾患に対する診断および治療を行っております。ERCPの技術を用いて膵癌や胆道癌の診断を行い、閉塞性黄疸や急性胆管炎に対してはドレナージを施行しています。胆管結石の除去や、胆道狭窄に対する胆管ステント留置なども多数行っております。

3）耳鼻咽喉・頭頸部外科の内視鏡検査・治療（ELPS）
様々な耳鼻科的疾患と関連する胃食道逆流症や頭頸部癌に合併しやすい食道癌などのスクリーニング検査を行っており、疾患が確認された場合には専門医と連携して治療にあたっています。また、消化器内科との合同手術（ELPS）を行い、患者さんに負担の少ない治療を行っております。

□ 外来のご案内

消化器内視鏡センターの直接予約は承っておりません。各診療科で外来受診をして頂いた後に、当センターでの検査および治療が予定されることとなります。

呼吸器内視鏡センター

センター長　清水（しみず）　泰生（やすお）
副センター長　専任　武政（たけまさ）　聡浩（あきひろ）

外来受付電話番号　0282-87-2197（呼吸器・アレルギー内科外来）
内視鏡室連絡番号　0282-87-2120

□ 特徴・特色

呼吸器内視鏡として気管支鏡と胸腔鏡の両者を扱う全国で初めて設立された歴史をもつ専門センターであり、高度かつ先端的な診断、治療を行っています。呼吸器・アレルギー内科、呼吸器外科、耳鼻咽喉・頭頸部外科、上部消化管外科の医師が検査を担当します。日本呼吸器内視鏡学会認定施設であり、気管支鏡専門医も多数、指導医も6名が所属しています。県内のみならず県外からのご紹介の患者さんも多くいらっしゃいます。安心で患者さんにやさしい診断精度の高い検査と治療を目指しています。

□ 診療内容

気管支鏡検査：肺癌など悪性腫瘍のほか、間質性肺炎、過敏性肺炎、サルコイドーシスなどびまん性肺疾患や呼吸器感染症の診断を行います。治療では、肺癌に対する内視鏡下腫瘍切除術、凍結プローブを用いた腫瘍減量術、光線力学療法（PDT）、気管支狭窄に対するバルーン拡張、気管支ステント留置、気管支喘息に対する気管支熱形成術なども行っています。超音波内視鏡や自家蛍光内視鏡、極細径気管支鏡など最先端の内視鏡機器を揃えています。年間検査件数は約600件です。

胸腔鏡検査：悪性中皮腫、癌性胸膜炎、結核性胸膜炎など診断のほか、急性膿胸の治療やタルク散布による胸膜癒着術などを行います。当科で開発した胸腔鏡専用スコープや特殊光診断装置が揃っています。年間検査件数は約40件です。

□ スタッフ

呼吸器・アレルギー内科	清水　泰生	教授
	武政　聡浩　専任	准教授
	池田　直哉　専任	助教
呼吸器外科	中島　崇裕	准教授
	井上　　尚	准教授
耳鼻咽喉・頭頸部外科	阿久津　誠	助教
上部消化管外科	中川　正敏	講師

◎最先端治療

気管支バルブシステムによる肺気腫治療。薬物治療によっても呼吸困難が改善しない肺気腫の方が対象になります（当院ご紹介後に治療適応有無の判断のために検査が必要となります）。2024年5月現在、日本でこの治療を行うことができる14施設のなかの1施設となっております。獨協医科大学　呼吸器内科または呼吸器外科にご紹介ください。

□ 診療概要（得意とする検査・治療）

1）無苦痛鎮静下気管支鏡検査
　静脈麻酔を施行して検査を行うため、ほとんど苦痛がなく、安心して安全な検査が受けられます。

2）ガイドシースとラジアル型気管支内超音波法を用いた肺末梢小病変の診断
　X線透視下でも確認できないような小病変は、従来の気管支鏡で診断することは、極めて困難でしたが、新規に開発されたガイドシースを用いて、気管支内腔超音波を行うことで病変部への到達を確認して生検できるため診断率が大きく向上しました。肺野末梢小型肺癌の診断に威力を発揮します。

3）コンベックス型気管支超音波を用いた中枢気管支周辺病変の診断
　コンベックス型気管支超音波法を用いると縦隔や肺門リンパ節など気管支壁外の病変を確認しながら穿刺生検できるため、従来、手術や縦隔鏡などを用いないと診断不能であった病変が診断できます。肺癌や悪性リンパ腫のみでなく、サルコイドーシスなど良性疾患の診断にも威力を発揮します。

4）クライオプローブを用いた肺生検
　気管支鏡を通して挿入したプローブの先端を二酸化炭素を用いて−45℃に冷却し、気管支や肺組織、腫瘍などを冷凍して採取するため通常の鉗子生検と比較して大きなサンプルを得られます。肺癌や間質性肺疾患の原因診断率が向上します。

5）特殊光診断による早期肺癌の検出
　自家蛍光気管支鏡や狭帯域光気管支鏡といった最新の内視鏡機器を用いて、レントゲンでは写らないような気管支内早期肺癌を見つけ出すことが可能です。これらの病変は後述の内視鏡下治療法で治療可能です。

6）気管支インターベンション
　高周波凝固法やアルゴンプラズマ凝固法、YAGレーザー法などを用いて気管支内腫瘍の治療を行います。また、気管支ステントを挿入し気道の狭窄を治療します。

7）重症気管支喘息に対する気管支熱形成術
　気管支鏡によって気管支に65℃の温熱を与えることで気管支平滑筋を減少させ治療します。

8）光線力学療法（PDT）
　光感受性物質を注射したのちダイオードレーザー光を病変部に照射することで腫瘍病変を選択的に焼灼し、気管支鏡的早期肺癌を手術せずに治療できます。

9）局所麻酔下胸腔鏡検査
　胸水貯留疾患の診断を安全、簡便、迅速かつ低侵襲に行うことができます。最近、話題のアスベスト曝露による胸膜悪性中皮腫の診断にも威力を発揮します。わが国でも最も検査件数が多い施設であり、国内外から多くの研修者を受け入れています。急性膿胸のドレナージやタルク散布による胸膜癒着術など治療法としても有用です。

□ 外来のご案内

呼吸器内視鏡センターでは直接外来診療受付は行っておりません。まず最初に、呼吸器・アレルギー内科、呼吸器外科、耳鼻咽喉・頭頸部外科、上部消化管外科など各診療科外来に受診あるいはご紹介ください。

□ 外来担当表

外来曜日別診療医一覧は、毎月当院ホームページにて更新されております。ホームページをご参照ください。
https://www.dokkyomed.ac.jp/hosp-m/outpatient/

PETセンター

□ はじめに

当施設は、栃木県で初めてPET/CT装置を２台導入し、現在は保険適用である[^{18}F]FDG薬剤を用いた検査（主にがん検査）を中心に、地域の共同利用型施設として運用しており、院内・他の医療機関からの依頼検査を通じ地域のがん医療の発展に貢献しております。

また、施設内には４核種製造可能なサイクロトロン（加速器）を設置しており、[^{18}F]FDG薬剤以外の最新の薬剤を使用した検査も行っております。

□ 医療設備・スタッフ

設備は、サイクロトロン１台、[^{18}F]FDG合成装置２台、[^{15}O]ガス合成装置１式、品質管理装置１台、連続自動投与装置１台を設置。PET/CT装置を２台導入し、将来は３台目を設置できるように予備室を用意しております。

スタッフは常勤医師１名（放射線診断専門医・核医学専門医・PET核医学認定医）とローテーション医師数名、診療放射線技師３名、看護師２名、薬剤師１名（ローテーション）、サイクロトロン運転員１名、事務員６名で運営しております。

※2016年11月に[^{18}F]FDG合成装置２台、連続自動投与装置１台、PET/CT装置１台を更新

※2017年11月にPET/CT装置１台を更新

□ 特徴・特色

PET/CT検査はPETの「代謝画像」とCTの「形態画像」の２つの機能を併せ持ち、短時間でほぼ全身の検査を実施でき、正診率が向上します。また身体への負担が少ないのも特徴です。

さらに造影CTの併用により、３次元画像を作成し、手術支援のための画像応用も研究しています。

□ 診療概要

(1) PET/CT検査により、がんのスクリーニング、良性、悪性の識別、病期診断、転移・再発診断、治療効果の判定を行っております。

● 保険適用の概要

① 悪性腫瘍（早期胃癌を除き、悪性リンパ腫を含む）
他の検査、画像診断により病期診断、転移、再発の診断が確定できない患者に使用する

② てんかん
難治性部分てんかんで外科切除が必要とされる患者に使用する

③ 心疾患
虚血性心疾患による心不全患者における心筋組織のバイアビリティ診断（他の検査で判断のつかない場合に限る。）、心サルコイドーシスの診断（心臓以外で類上皮細胞肉芽腫が陽性でサルコイドーシスと診断され、かつ心臓病変を疑う心電図又は心エコー所見を認める場合に限る。）又はサルコイドーシスにおける炎症部位の診断が必要とされる患者に使用する

④ 血管炎
高安動脈炎等の大型血管炎において、他の検査で病変の局在又は活動性の判断のつかない患者に使用する

● PET/CT装置であることから、目的によって応じ、以下の検査を実施しております

① PET（CTフュージョン）検査＋単純CT検査

② PET（CTフュージョン）検査＋造影CT検査

PET/CT検査の有用性、あるいは保険適用の有無など、何かご不明な点がありましたら、お気軽にPETセンターまでお問い合わせください。

(2) 健診センターとのドックと組み合わせ、健康診断としてのPET検査も行っており、以下の３つのコースがあります。

① PET＋CT（胸部）検診　－　PETセンター

② 短期ドック＋PET検診　－　健診センター

③ 長期ドック＋PET検診　－　健診センター

検診の詳しい内容・費用などについてはPETセンターまたは健診センターへお問い合わせください。

PETセンター直通電話　0282－85－1166

健診センター直通電話　0282－87－2216

センター長　中神（なかがみ）　佳宏（よしひろ）

外来受付電話番号　0282-85-1166

□ 外来のご案内

健康診断としてのPET検査について詳しい説明を聞きたい方、または、その検査結果について専門医による説明を受けたい方が対象です。

- 完全予約制
- 担当医：中神医師ほか
- 外来対象者：原則としてPET/CT検診を受診され、結果説明をご希望の方

□ PETセンターで検査を受けるには

検査をご希望の場合には、主治医の先生にご相談ください。また検診目的の場合は、まずは当センターへ電話にてお問い合わせください。

- 検査予約・お問い合わせ ／
  【月～土】 9:00 ～ 16:30
  （第３土曜を除く）

直通電話：0282－85－1166
FAX：0282－85－1170

【PETセンターホームページ】
http://www.dokkyomed.ac.jp/hosp-m/

□ 建物概要

建物概要		鉄筋コンクリート造り、地下１階、地上２階建 延べ面積　1,848.57㎡
各階構成	２階	899.33㎡　受付、読影室、事務室他
	１階	808.90㎡　検査室、待機室、サイクロトロン他
	地下	140.34㎡　排水処理機械室

総合がん診療センター

□ 特徴・特色

がんの診療は近年、様々な分野で急速に進歩し、変化しています。2019年には「がんゲノム診療」が保険収載されることになり、獨協医科大学病院においても「がんゲノム診療」が実施できるようになりました。この他にも多くの特徴がある優れた獨協医科大学病院のがん診療を、よりスムーズに皆様に提供できるという目標を達成するために、各科の垣根を超えたがん診療全体の総合的支援を行う部門として、これまでの「腫瘍センター」という名称から、よりわかりやすい「総合がん診療センター」という部門として、新たに再出発いたしました。

総合がん診療センターの活動内容

がんゲノム診療部門

がんゲノム医療とは、“がん”の遺伝子変化に着目した医療です。がんゲノム医療の中心となる『がんゲノムプロファイリング検査（がん遺伝子パネル検査）』は、2019年に保険収載された比較的新しい検査であり、当院は東京大学医学部附属病院のがんゲノム医療連携病院として当初より携わっております。この検査では、“がん”の発生や進行に関与した遺伝子変化を解析し、その人に合う新たな治療戦略を模索します。保険診療で使用できる薬剤以外にも、随時行われている「治験」や「臨床試験」などをご紹介できる場合があります。解析に使用するのは、手術や生検で採取した組織を基本としますが、採取できる組織がない場合や、保存している組織が解析に適さない場合は、ctDNA（血液中に循環しているがん細胞）で解析することも可能です。標準治療を終了された方、または終了見込みの方、あるいは標準治療のない“希少がん”の方が対象となります。がんゲノム診療部門では、各部署や担当の先生方と連携し、常に最新の情報を入手し、よりよい医療をご提供できるよう取り組んでおります。

化学療法部門

がんの化学療法はがん治療の中でも急速に進歩している分野です。様々な分子標的治療薬や、免疫チェックポイント阻害剤など、新たな薬剤も次々に導入されています。又、投与の際の管理方法の工夫により、自宅で家族と過ごしながら、あるいは仕事を続けながら、治療を継続することが可能になってきました。当院の外来化学療法室では年間約10,000件の薬物療法を施行しています。入院が必要となる治療も含め、全ての薬剤を安全に、正確に投与すること、そして患者さんに分かりやすい説明や指導を行うことを目標としたシステムを構築し、ガイドラインに沿った標準治療を行っています。

緩和ケア部門

がんそのものの症状や、がん治療に伴う様々な副作用（痛み、吐き気、体重減少、など、様々）は、時に患者さんに大きな負担を強いることになります。獨協医科大学病院では治療を受けられる患者さんのそのような負担を軽減し、より安心して治療が受けられるよう、多職種で構成された緩和ケアチームが活動しています。入院患者さんに対するケアや、外来でのケアを、患者さんや担当医師の要望によって積極的に行っていきます。

キャンサーボードの開催

現在のがんの診療は、高度な機器を駆使した診断、内視鏡やITを用いた先進的な外科手術、様々な薬剤を用いた化学療法、より精度の高い機器を駆使した放射線療法、さらには薬剤やカウンセリングを通して疾患や治療に伴う様々な苦痛を和らげる緩和ケアなど、実に多岐にわたる面から行われています。このような包括的ながん診療は、単一の科のみで行うことは難しい場合があります。治療方針の決定に複数の部門の参加が必要な患者さんについては、関与する複数の診療部門を交えたカンファレンス、いわゆるキャンサーボードが行われて、方針の決定を行なっています。総合がん診療センターではその推進を行なっています。

相談支援部門

がん相談支援センター

がんに限ることではありませんが、病気は家族の問題でもあります。高額な医療費や、介護の問題、在宅治療を望まれる場合の様々な手配など、困ったときにご相談にのるために、専門の相談支援部門も設置しています。

セカンドオピニオン外来

セカンドオピニオン外来は、現在他の医療機関でがんの診療を受けられている患者さんやそのご家族が、診断や、今後の治療方針、治療方法などについて、獨協医科大学病院のエキスパートにも意見をお聞きになりたいと希望される場合にきていただく外来です。それぞれのがんのエキスパートが、時間の限られた普段の外来での診察ではなく、十分な時間を取ってこれまでの経過やデータをお聞きして、治療方針についての判断をお伝えします。このため、予約制で行っています。あらかじめ相談されたい医師を指名されることもできますし、病状に応じてこちらの方から適任と思われる医師を紹介することもできます。

各種セミナーや講演会などの開催

医療従事者や患者さん、家族を対象とした研修会、講演会の企画運営その他患者会等の支援を行っております。皆様のご参加をお待ちしております。情報は随時ホームページに掲載いたします。

HP: https://dokkyomed-ccc.jp/news/

総合がん診療センターへの受診や相談窓口

がんに関する相談：[がん相談支援センター]

電話：0282-87-2053（直通）平日　9：00～16：00

(来訪相談を希望される際にも事前に電話にて予約をお願い致します。)

がんセカンドオピニオン予約受付：

電話：0282-87-2053（直通）平日 9：00～16：00

ファックス：0282-87-2053（24時間対応）

□ がんに関するセカンドオピニオン外来について

1．お電話にて、がんに関するセカンドオピニオン外来予約受付にご連絡ください。
2．事務担当が受け付けをして、必要な書類をお送りいたします。（ホームページからダウンロード可）
3．「申込書」を郵送またはファックスにてお送りください。（送信先のご確認は慎重にお願いします）
4．「申込書」に基づき、がんに関するセカンドオピニオン外来担当医に予め受診内容を打診し、受診日をご連絡します。
5．それまでに主治医の先生に「主治医の先生へのお願い」をお渡しのうえ、「がんに関するセカンドオピニオン外来専用診療情報提供書」を作成していただき、資料を借りてください。
6．受診当日は、「正面受付（初再診受付）」にて本日の予約でがんに関するセカンドオピニオン外来受診することをお申し出いただければ担当者がご案内いたします。
7．受診後、主治医の先生へのご報告をお受け取りののち、会計をお願いいたします。

【受診に際して必要なもの】

1．相談者さまがご本人以外では「相談同意書」、ただし、患者さんが未成年の場合は、ご相談者さまとの続柄を示す書類（健康保険証等）。
2．主治医の先生に書いていただいた、「がんに関するセカンドオピニオン外来専用診療情報提供書」
3．できる限りの検査資料をお借りしてお持ちください。
　(1) 血液検査の結果（2）超音波検査の結果と画像
　(3) レントゲン検査、MRI検査、CT検査の実物フィルム
　(4) 病理検査の報告書等

詳細につきましては、当院ホームページでもご案内させていただいております。当院ホームページをご参照ください。

HP: https://www.dokkyomed.ac.jp/hosp-m/revisit/consu/tation/second opinion.html

センター長	仁保 誠治
化学療法部門長	別納 弘法
緩和ケア部門長	白川 賢宗
院内がん登録部門長	井上 尚
がんゲノム診療部門長	田中 優子
相談支援部門長	別納 弘法

外来受付電話番号　0282-87-2053

□ がんに関するセカンドオピニオン外来・疾患別担当医一覧

対象疾患	担当科	氏名	職名
食道癌	消化器内科	郷田 憲一	教　授
	上部消化管外科	中島 政信	准教授
胆・肝・膵臓癌、転移性肝癌	肝・胆・膵外科	青木 琢	教　授
肝臓癌(IVR)	放射線科	石原 克俊	講　師
胃・十二指腸癌	上部消化管外科	小嶋 一幸	教　授
	上部消化管外科	森田 信司	准教授
	消化器内科	郷田 憲一	教　授
肝臓癌	消化器内科	飯島 誠	准教授
	消化器内科	大西 俊彦	助　教
大腸癌	消化器内科	冨永 圭一	准教授
	消化器内科	菅谷 武史	准教授
	消化器内科	金森 瑛	助　教
胆道癌・膵臓癌	消化器内科	入澤 篤志	教　授
大腸・直腸癌	下部消化管外科	水島 恒和	教　授
	下部消化管外科	中村 隆俊	教　授
	下部消化管外科	石塚 満	准教授
乳癌	乳腺センター	中川 剛士	教　授
脳腫瘍、脳・脊髄転移	脳神経外科	宇塚 岳夫	准教授
脳腫瘍、転移性脳腫瘍	脳神経外科	叶 秀幸	教　授
頭頸部癌	耳鼻咽喉・頭頸部外科	今野 渉	講　師
頭頸部癌・皮膚軟部腫瘍・乳癌	形成外科	飯田 拓也	教　授
皮膚癌	皮膚科	鈴木 利宏	准教授
眼内腫瘍	眼科	妹尾 正	教　授
	眼科	松島 博之	准教授
	眼科	永田万由美	准教授
	眼科	鈴木 重成	講　師
口腔癌	口腔外科	川又 均	教　授
	口腔外科	和久井崇大	准教授
	口腔外科	福本 正知	講　師
	口腔外科	小宮山雄介	講　師

対象疾患	担当科	氏名	職名
肺癌	呼吸器・アレルギー内科	仁保 誠治	教　授
	呼吸器・アレルギー内科	清水 泰生	教　授
	呼吸器・アレルギー内科	武政 聡浩	准教授
	呼吸器・アレルギー内科	新井 良	講　師
	呼吸器外科	千田 雅之	教　授
	呼吸器外科	前田寿美子	教　授
	呼吸器外科	中島 崇裕	准教授
肺癌(診断)	放射線科	荒川 浩明	准教授
急性白血病、慢性骨髄性白血病、骨髄異形成症候群	血液・腫瘍内科	今井 陽一	教　授
多発性骨髄腫、悪性リンパ腫	血液・腫瘍内科	今井 陽一	教　授
造血器疾患	血液・腫瘍内科	佐々木 光	准教授
子宮頸癌、卵巣癌、子宮体癌	産科婦人科	三橋 暁	教　授
腎癌、副腎腫瘍、後腹膜腫瘍	泌尿器科	釜井 隆男	教　授
前立腺癌	泌尿器科	安士 正裕	教　授
腎盂尿管癌・膀胱癌、精巣腫瘍	泌尿器科	木島 敏樹	講　師
IVR(画像ガイド下治療)	放射線科	曽我 茂義	教　授
放射線治療全般	放射線治療センター	江島 泰生	教　授
骨肉腫、脳腫瘍、術前術後リハビリテーション	リハビリテーション科	中村 智之	講　師
脊椎転移癌	整形外科	種市 洋	教　授
	整形外科	稲見 聡	教　授
	整形外科	森平 泰	准教授
	整形外科	髙畑 雅彦	准教授
四肢骨転移癌	整形外科	冨沢 一生	講　師
	整形外科	瓜田 淳	講　師
小児癌	小児科	福島啓太郎	講　師
	小児科	佐藤 雄也	准教授
	小児科	奥谷真由子	講　師
神経芽腫、肺芽腫 腎芽腫 他 小児固形腫瘍	小児外科	鈴木 完	准教授
緩和ケア(疼痛)	麻酔科	山口 重樹	教　授
	麻酔科	白川 賢宗	講　師

※担当医の詳しい情報は病院ホームページをご確認ください

超音波センター

センター長　竹川（たけかわ）　英宏（ひでひろ）
特任教授　髙田（たかだ）　悦雄（えつお）
技師長　今野佐智代（こんのさちよ）

外来受付電話番号　0282-87-2290

□ 特徴・特色

超音波センターには心臓・腹部・体表超音波室があり、心臓・血管内科/循環器内科、消化器内科、腎臓・高血圧内科、脳神経内科、内分泌代謝内科、放射線科、小児科、健康管理科が検査を担当し、また超音波センターとしての検査日を設けています。対象となる臓器はほぼ全臓器といってよく、頚動脈エコーや下肢静脈瘤の術前マーキングなど末梢血管の検査も行われています。血流情報に関しては、カラードプラ、パワーモードに加え、超音波造影剤を用いた検査も積極的に行っています。エラストグラフィやリアルタイムバーチャルソノグラフィ（RVS）も実施しています。この他、インターベンショナルな検査・治療として超音波ガイド下穿刺細胞診・生検・吸引式組織生検、経皮的エタノール注療法（PEIT）、ラジオ波焼灼療法（RFA）にも対応しています。年間18,300件（腹部4,000件、心臓6,200件、体表6,100件、乳腺2,000件）以上行っています。

□ 医療設備・スタッフ

フルデジタル超音波診断装置9台（心臓4台、腹部5台、体表1台）を備え、Live3Dに対応した心臓用超音波診断装置4台、腹部用診断装置3台が導入されています。検査画像はDICOM画像ファイリングシステムにデジタル保存され、レポートと共にオンラインで閲覧可能です。各科の医師がそれぞれ専門分野の検査を担当し、専任の超音波検査士6名も検査に携わっています。2024年4月現在、日本超音波医学会認定の指導医が2名、同認定専門医が4名および同認定超音波検査士6名であり、専任の看護師3名で看護・受付業務を担当しています。

□ トピックス

オーダリングシステムからワークリスト、DICOM画像記録、レポーティングシステムへと一連の機能的な流れを持つシステムが稼動し、超音波センターの画像およびレポートは電子カルテ化されています。オーダ情報からモダリティワークリスト、レポートワークリストが作成され、対応装置ではそのリストから患者情報がインプットされます。DICOM SRに対応した装置からは計測情報がオンラインレポートに自動的に記入されレポート作成が簡略化されます。レポートへの画像の貼り付けもレポートサーバ、DICOMサーバとで連携し容易に行なうことができます。

超音波医学は超音波断層法を中心とする検査だけでなく、PEITやRFAの治療の補助にも使われますが、超音波のエネルギーによる腫瘍の治療や、抗がん剤のDDS（Drug Delivery System）への応用も行われつつあります。こういった治療の面にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

MVFI（Microvascular flow imaging）と呼ばれる微細血流イメージングで低流速の血流などの計測を行うことも可能です。

このほか超音波による乳がん検診の戦略的研究に参加したほか、乳がん集団検診専用超音波診断装置の開発を行ないました。現在、乳腺腫瘍のカラードプラ研究にも参画しています。

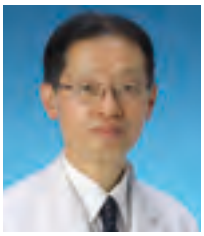
研究・教育分野では、医師のみならず、超音波検査士による学会・論文発表を行なっているほか、超音波関連学会でのハンズオン講師に加え、当院での研修指導も受け付けています。

また甲状腺健康調査のほか、社会貢献として栃木県および（公社）日本脳卒中協会栃木県支部と協力し、イベントで頚動脈超音波検査を行なっています。

【超音波センターホームページ】
https://www.dokkyomed.ac.jp/hosp-m/department/consultation_organization/132
電話：０２８２－８７－２２９０
FAX：０２８２－８７－２４８７

睡眠医療センター

センター長　宮本（みやもと）　雅之（まさゆき）
中島（なかじま）　逸男（いつお）
有川（ありかわ）　拓男（たくお）
鈴木（すずき）　圭輔（けいすけ）
今井（いまい）　貫太（かんた）



外来受付電話番号　0282-87-2510

□ 特徴・特色

近年、睡眠障害における社会的意義や生活習慣病との関連について広く認識されるようになりました。当センターは睡眠障害に悩まされている方々のための「睡眠医療の窓口」かつ「総合診療部門」です。外来部門（睡眠医療外来・睡眠時無呼吸外来）と入院部門（睡眠ポリグラフ検査）からなります。当センターは日本睡眠学会（http://www.jssr.jp/）における北関東地域で数少ない学会認定医療機関施設で、同学会総合専門医・指導医が中心になり関連する各診療科・部門と連携をとりながら診療を担当しております。そして2005年12月には、栃木県から医療広告の特例許可を頂きました。また、地域医療連携を当センターの理念のひとつとして掲げ、睡眠医療の拠点病院として地域の医療機関との連携を積極的に推進しております。

□ 診療内容

睡眠関連呼吸障害（睡眠時無呼吸症候群・いびき）、レム睡眠行動異常（寝言や夢の中での異常行動）などの睡眠時随伴症、ナルコレプシー、レストレスレッグス症候群（むずむず脚症候群）、周期性四肢運動異常を中心に睡眠関連疾患全般を幅広く診療しております。

□ 診療実績（2023年度）

1年間のべ患者総数	6,877名
1年間新患総数	342名
1年間終夜ポリグラフ検査（PSG）件数	268件
1年間反復睡眠潜時検査（MSLT）件数	31件
1年間CPAP新規導入台数	156台
CPAP管理台数（2024年3月31日現在）	611台

□ 診療体制

外来診察室は、一般診察室3室、CPAP管理室1室、耳鼻科診察室1室を保有し、診療は、日本睡眠学会総合専門医・指導医が中心に、宮本雅之（脳神経内科）、鈴木圭輔（脳神経内科）、中島逸男（耳鼻咽喉・頭頸部外科）、有川拓男（心臓・血管内科/循環器内科）、今井貫太（耳鼻咽喉・頭頸部外科）が担当しております。

診療日は、脳神経内科が毎週月・木・金曜日（月・金曜日は午前中のみ）、耳鼻咽喉・頭頸部外科が毎週月・火曜日の午後、心臓・血管内科/循環器内科が毎週水曜日の午前中と毎週金曜日の午後です。とくに睡眠時無呼吸症候群の診療では先の3科と臨床工学部の臨床工学技士のサポートによるCPAP療法、鼻科を含めた外科的手術治療に加えて、口腔外科（口腔内装置による治療）、内分泌代謝内科、精神神経科（不眠症を中心に精神疾患に伴う睡眠障害）、リハビリテーション科（運動療法の指導）、健診センター（睡眠時無呼吸症候群の検診）が診療協力科として参加しております。また、耳鼻咽喉・頭頸部外科にて、睡眠時無呼吸症候群の最新の治療である舌下神経電気刺激療法を行っています。とくに、新患の方は、完全予約制となっており、受診の際にはかかりつけ医の紹介状を必ず持参してください。詳細は受診前に睡眠医療センターの外来窓口にお問い合わせください。

□ 主な医療設備（PSG室、専用個室）

終夜睡眠ポリグラフ検査（PSG）室3床とモニター室1室を保有し、1泊2日の素泊まり入院で、週5日（月～金曜日）、1日2例のPSGを、また週1日（金曜日）1例、ナルコレプシーなどの過眠症の診断のための反復睡眠潜時検査（MSLT）を日本睡眠学会専門検査技師を中心に臨床検査センターの検査技師が担当しています。このほか、睡眠時無呼吸症候群のスクリーニングのための携帯型呼吸循環モニター（簡易型モニター）、終夜経皮的動脈血酸素飽和度測定（パルスオキシメーター）、睡眠覚醒リズム評価のためのアクチグラフおよび睡眠時の血圧管理のための24時間血圧測定（ABPM）の施行が可能です。また、睡眠時無呼吸を無拘束に測定する医療機器も取り入れています。

ハートセンター

センター長　福田（ふくだ）　宏嗣（ひろつぐ）
副センター長　豊田（とよだ）　茂（しげる）

外来受付電話番号　0282-87-2191（心臓・血管内科 / 循環器内科）
0282-87-2206（心臓・血管外科）

□ はじめに

ハートセンターは、2011年4月に開設され、心臓・血管疾患診療に携わる当院2つの診療科（心臓・血管内科/循環器内科、心臓・血管外科）の医師が、医療従事者とともに各診療科の枠組みを超え、一致協力して診療を行うことで、これまで以上に質の高い医療を多くの患者さまに提供することを目標としています。

□ 診療内容

病院全体の病棟再編成の一環として2011年7月に、本館5階東西南北をハートセンター専用病棟として開設し、内科・外科が同じフロアで患者さまのケアに当たっております。

診療内容としては、これまで力を入れてきた超急性期医療に加え、内科的治療抵抗性の急性左心不全を主体とする心原性ショック症例に、新しい治療方法であるIMPELLAという左心室から直接脱血し、大動脈に順行性に送血する心内式軸流ポンプカテーテルが2018年より施行できるようになり、より重症例に対応できるシステムが構築されました。また2013年植え込み型補助人工心臓施設認定をうけ、心臓移植の橋渡しとして植え込み型人工心臓装着患者さんも増えています。さらに高齢化による重症心不全患者さんの増加にも対応すべく、本学特任教授鄭忠和先生の開発した非侵襲的な治療法である和温療法を2台導入し心不全治療にあたっています。この和温療法は2020年4月に保険償還されました。

心臓リハビリテーション部門では、心筋梗塞・狭心症・心不全や心臓術後の患者さんを対象に、入院中だけでなく外来での心臓リハビリテーションも行っています。入院中は急性期のベッドサイドでのリハビリから、歩行が可能になってからのエルゴメーターによる有酸素運動を行い、低下した筋力の回復のためセラバンドを使用した運動も併せて行っています。退院後も継続することが大切であり、医師・理学療法士・看護師が一体となってサポートしています。病気に対する理解や再発予防への知識が得られ、在宅での自己管理ができるよう、疾病教育や栄養指導、面談なども行っています。2018年度診療報酬改定では、悪性腫瘍だけでなく心不全末期の緩和ケアについて緩和ケア診療加算が認められ、心不全末期の診療体制確立が重要視されています。当センターでも多職種よりなる心不全サポートチームを立ち上げ、定期的にカンファレンスを重ね、今後末期心不全患者さんの在宅医療に対応すべく、地域で在宅医療を担っている先生方と連携し、システムを確立したいと考えます。さらに、2020年4月からは、寄付講座（加圧トレーニング®医学講座）が開設され、新たなリハビリ法の臨床研究を実施していく予定です。

2015年より開胸手術が困難な高齢者重症大動脈弁狭窄症に対する経カテーテル大動脈弁置換術（TAVI）を当院でも開始いたしましたが、2021年4月現在226例の患者さんに行うことができました。今後も本症は増加することが予想されます。高齢患者さんには低侵襲であるTAVIが治療の選択肢としてより重要性が増すと思われます。さらに重症僧帽弁閉鎖不全症に対するカテーテル治療（マイトラクリップ）も始まり、症例を重ねつつあります。

当センターでは重症虚血肢に対する治療も積極的に行っております。和温療法は難治性閉塞性動脈硬化症に有効で、各種治療法と組み合わせて行っております。

以上のようにこれまで以上に心臓・血管疾患患者さんに質の高い医療を提供させていただく所存です。

【主な対象疾患】

○虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）
○心不全（重症心不全）
○心筋症（拡張型心筋症、肥大型心筋症、虚血性心筋症）
○心筋炎
○心臓弁膜症（大動脈弁疾患、僧帽弁疾患、三尖弁疾患）
○不整脈（頻脈性不整脈、徐脈性不整脈）
○先天性心疾患（心房中隔欠損症、心室中隔欠損症、動脈管開存症ほか、成人先天性心疾患）
○心臓腫瘍
○大動脈疾患（急性大動脈解離、胸部・腹部大動脈瘤）
○末梢血管疾患（急性動脈閉塞症、慢性動脈閉塞症、閉塞性動脈硬化症、バージャー病、深部静脈血栓症）
○肺血栓塞栓症

□ 外来のご案内

現時点ではハートセンターに患者さまをご紹介していただく際には、まず、心臓・血管内科/循環器内科、心臓・血管外科の各診療科外来に受診あるいは紹介ください。今後体制が整い次第、窓口を一本化することで患者さまやご紹介いただく先生方へのより高い利便性を図る予定です。

臨床検査センター

センター長　小飼（こがい）　貴彦（たかひこ）

技師長　新保（しんぼ）　敬（けい）

外来受付電話番号　0282-87-2175

□ 特徴・特色

臨床検査センターは、獨協医科大学病院の理念である「高度で良質な医療の提供」に基づき、医療チームの一員として日々変化する病院組織のニーズに合わせた品質目標を定め、「高品質な臨床検査を保証する」、「臨床検査従事者の技術向上」、「病院利用者へのサービスの向上」、「医療安全管理の継続」、「臨床検査の情報提供」の５つの品質目標を柱として掲げ、臨床検査を通じて患者さんの健康をサポートするべく業務にあたっています。

また、臨床検査センターは臨床検査室の国際基準であるISO 15189を取得し、その要求事項に基づいたQMS（品質マネジメントシステム）を構築し、高度で良質な医療を患者さんや各診療科へ提供または維持するために日々努力しています。

□ スタッフ

医師３名　小飼（こがい） 貴彦（たかひこ）、福島（ふくしま） 篤仁（あつひと）、伊藤（いとう） 裕佳（ゆか）（臨床検査専門医１名、臨床検査管理医１名、産業医２名、臨床微生物認定医１名、臨床遺伝専門医１名、研修指導医２名、難病指定医１名、認定内科医１名、感染症専門医１名、ICD2名）

臨床検査技師56名（パートタイム３名、感染制御センター出向１名）

医学博士１名、日本臨床検査同学院認定１級臨床検査士２名、２級臨床検査士・緊急臨床検査士40名（多くの技師が複数分野保有）、超音波検査士４名、認定微生物検査士３名、感染制御認定臨床微生物検査技師３名、認定心電図専門士２名、心電図検定１級１名、心電図検定２級４名、認定心理士１名、診療情報管理士１名、認定血液検査技師４名、認定骨髄検査技師１名、認定サイトメトリー技術者１名、JAB認定 ISO 15189 臨床検査室 技術審査員１名、認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師３名、認定一般検査技師２名、認定穿刺液細胞検査技師１名、認知症介助士１名、日本睡眠学会認定検査技師４名、専門技術師　脳波分野２名、専門技術師　筋電図・神経伝導分野２名、栄養サポートチーム専門療法士３名、認定臨床染色体遺伝子検査師遺伝子分野２名、認定HLA検査技術者２名、遺伝子分析科学認定士（初級）４名、細胞検査士１名、POCT測定認定士１名、日本糖尿病療養指導士１名、上級健康食品管理士２名

事務員４名（パートタイム）、技術員10名（パートタイムを含む）、採血短時間勤務看護師・臨床検査技師９名（パートタイム）

□ 主な業務

1．検体検査

①採血業務、②検体搬送・分離業務（外来は自動搬送ロボットを導入）、③検査項目の追加・削除業務、④生化学検査、⑤免疫血清検査、⑥血液学検査、⑦遺伝子・HLA検査、⑧血液凝固・線溶検査、⑨一般（尿・糞便）検査、⑩微生物（細菌・真菌）検査、⑪感染制御センターへの出向、⑫栄養サポートチーム、⑬がんゲノム診療部門のサポート、⑭糖尿病センターのサポート、⑮手術室等の血液ガス分析装置の精度管理、⑯血液腫瘍内科と小児科の骨髄採取のサポート、⑰血液腫瘍内科と小児科の末梢血・骨髄像カンファレンス、⑱データ抽出サービスなどを行っています。

2．生体検査

①心電図検査（病棟出張を含む）、②トレッドミルによる負荷心電図検査のサポート、③ホルター心電図解析および患者さんへの説明、④体成分分析検査（InBody）、⑤心音図検査、⑥脈波検査、⑦脳波検査（病棟出張を含む）、⑧神経伝導速度検査、⑨呼吸機能検査、⑩皮膚灌流圧検査、⑪終夜睡眠ポリグラフ検査（宿直業務を含む）、⑫整形外科領域の術中神経モニタリング監視者、⑬健診センター（超音波検査）のサポートなどを行っています。

3．時間外緊急検査（24時間対応）

二次・三次救急病院のため、生命危機が切迫している重症な患者さんに対応する主要な項目は24時間緊急検査を行っています。

リウマチセンター

□ 診療内容

関節リウマチの患者さんの数は日本全体で約70万人と言われています。最近は検査法や薬が進歩し、とくに生物学的製剤と呼ばれる新しい薬の効果はめざましく、多くの患者さんの関節の障害を防ぐことができるようになりました。一方で、不幸にして関節の痛みや変形がひどくなった場合には、適切なタイミングで手術を行う必要があります。また、合併症や副作用などで標準治療が難しい患者さんにも対応する必要があります。

当センターでは、内科と整形外科のリウマチ専門医（日本リウマチ学会指導医・専門医）が緊密な意見交換をしながら、患者さんひとりひとりに最適な治療を提供いたします。また日本リウマチ財団認定リウマチケア看護師が皆様のお手伝いをいたします。

【対象疾患】

関節リウマチ、強直性脊椎炎
膠原病（全身性エリテマトーデス、強皮症、多発性筋炎、ベーチェット病など）

□ 特徴・特色

1）内科と整形外科の両面からリウマチの診断・検査・治療を行います。
2）初診・再診ともに予約制とし、患者さんひとりひとりに十分な診察時間を取ります。
3）病気の早い時期から積極的に治療を行って、将来の身体の不自由を防ぎます。
4）副作用が起こった時には、24時間、素早く対応します。
5）薬、リハビリテーション、装具、医療費などのご相談に応じます。
6）手術はリウマチ外科の経験を積んだチームが担当します。
7）多数の医療機関と連携する栃木リウマチコミュニティを通じて、ご都合の良い地域で専門医の治療を受けられるように配慮します。

□ 診療体制

1）初診：月～金
原則として紹介・予約制となっております。当センター受診をご希望の場合には、かかりつけの医師にご相談の上、紹介状をもらってください。予約はお電話（0282－87－2506）でお願いします。『リウマチセンター（内科）』（リウマチ・膠原病内科）または『リウマチセンター（整形外科）』（整形外科）どちらかの予約となります。内科系か外科系で不明の場合はリウマチセンター宛にお送り下さい。

2）再診：月～土
予約制で診療いたします。病院正面の自動受付機に診察券を通した後、『リウマチセンター（内科）』（リウマチ・膠原病内科）または『リウマチセンター（整形外科）』（整形外科外来）の窓口にお越しください。
急に具合が悪くなった場合には、まずはかかりつけの科にお電話をお願いします。

3）入院：
治療内容によって、リウマチ・膠原病内科、整形外科など、最適の診療科に入院していただくようにいたします。

4）その他：
薬、リハビリテーション、装具、医療費などのご相談は、担当医にお申し出ください。

センター長　池田　啓

副センター長　富沢　一生

外来受付電話番号　0282-87-2506

□ スタッフと専門領域

氏名	職名	専門分野	専門医
池田　啓	教　授	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	＊1
有馬　雅史	教　授	アレルギー、呼吸器疾患	
前澤　玲華	准教授	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	＊1
富沢　一生	講　師	関節リウマチ、関節外科	＊2
新井　聡子	講　師	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	＊1
関本　厳雄	講　師	関節リウマチ、関節外科	＊2
田中　彩絵	助　教	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	＊1
宮尾　智之	助　教	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	＊1
長谷川杏奈	助　教	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	＊1
檜山　知佳	助　教	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	
相澤　有紀	助　教	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	
吉田　雄飛	助　教	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	
菊地　梓	助　教	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	
佐藤　理華	レジデント	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	
諏訪　瑞貴	レジデント	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	
竹越麻祐子	レジデント	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	
長　櫻子	レジデント	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	
倉沢　和宏	特任教授	関節リウマチ、膠原病、自己免疫疾患	＊1

＊各医師の担当曜日等は、別紙「外来曜日別診療医一覧表」でご確認ください

＊1：一般社団法人　日本リウマチ学会　リウマチ専門医
＊2：公益社団法人　日本整形外科学会　整形外科専門医

□ 外来担当表（2024年4月1日現在）

	月	火	水	木	金	土
リウマチセンター（内科）	有　馬 田　中 吉　田	池　田 前　澤 宮　尾	池　田 田　中 菊　地	前　澤 長谷川 相　澤	倉　沢 新　井 檜　山	交代制
リウマチセンター（整形外科）				富　沢 関　本	富　沢	

＊変更になる場合がありますので、予約の際にお確かめください。

前立腺センター

□ 診療内容

臓器限局性前立腺がん（早期）から転移性さらには去勢抵抗性前立腺がんまで幅広い病期に対応し、いずれの病期の前立腺がんに対してもエビデンスに基づいた治療を基本としています。定期的な多診療科合同カンファランスを行っており、さらに治療難渋が予想されるなど個別対応を必要とする事例に対しては、適宜迅速に多診療科およびコメディカルとのチームカンファランスを実践し、適切な治療が行われるようクオリティコントロールがされています。

早期前立腺がんに対しては、2012年秋から da Vinci S サージカルシステムを導入し、ロボット支援根治的前立腺全摘手術（Robot Assisted Radical Prostatectomy, RARP）を開始しております。2019年春からはda Vinci Xiサージカルシステムに移行して稼働しております。高解像度三次元視野のもとで関節を有する腹腔鏡鉗子を操作できることから、より詳細に前立腺の立体構造が把握でき、人間の手を凌駕するぶれのない確実な手術操作が実現されています。現在では年間160件以上の実績があります。（安全性を考慮した当院独自の症例適用基準および除外規準を設けています）。そのため、これまでの手術法に比べて出血量の減少、排尿機能および男性機能の温存、そして確実ながんのコントロール、入院日数の短縮が可能となってきています。手術が適応にならない症例や放射線治療を希望される場合には、IMRT（強度変調放射線治療）を行っております。

□ 特徴・特色

食生活様式の欧米化やPSA（前立腺特異抗原）測定の検診導入、および国民の疾患に対する認知度が高まっていることなどから、前立腺がんの患者数は本邦において増加し続けており、2015年には男性が罹患する悪性疾患の第一位になりました。前立腺がんは早期がんから転移性さらに去勢抵抗性がんにいたる幅広い病期がありますが、病期ごとに治療戦略は異なり、それを適切に適用していくことが求められます。近年の前立腺がんの臨床を取り巻く環境はめまぐるしく変化しており、診断検査方法、手術方法、放射線療法、そして薬物療法など進歩を遂げる一方で、より複雑多様化しています。このような背景から、泌尿器外科医のみならず放射線科医や病理診断医、さらにコメディカルを含めたチーム医療が必須な状況になってきており、それを実践する目的で前立腺センターが設立されています。

□ 外来診療日・スタッフ

月曜日～金曜日午前中、泌尿器科外来スタッフが対応しています。ロボット手術施行医は現在10名で対応しています。セカンドオピニオンは主に午後、および適宜午前中に受けることが可能です。

□ 最近のロボット支援下前立腺全摘除術（RARP）の治療成績

以下は2023年3月までのRARP手術統計データ（平均値）です。下線部分は従来の開腹手術法よりも改善している点です。近年、腫瘍学的成績改善を目的として積極的に拡大リンパ節郭清を行っていることや、併存疾患のある症例に対しても安全対策を施した上で手術を行っているため、手術時間が延長していますが、主術者による総手術時間は現在157分、コンソール時間125分、出血（尿込み）186mlであり、手術の低侵襲手術が維持されています。さらに機能温存（勃起機能、尿禁制）と腫瘍学的結果も良好な成績となっています。

① 総手術時間（皮膚切開から閉創まで）：183分

② コンソール時間（ロボット操作時間）：148分

③ 出血量：227ml

④ 尿道カテーテル抜去：術後5日目

⑤ 入院日数：10日間

⑥ 神経温存症例の割合：23.8%

⑦ 尿禁制獲得率（1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月）
：54.5%，85.9%，94.1%

⑧ 外科断端陽性率（T2以下、全Tステージ）
：12.2%，22.9%

センター長　釜井　隆男

副センター長　安士　正裕

外来受付電話番号　0282-87-2208

□ 外来担当医師および専門分野

氏名	職名	専門分野	専門医
釜井　隆男	教　授	泌尿器外科学	＊1
安士　正裕	教　授	泌尿器外科学	＊1
木島　敏樹	講　師	泌尿器外科学	＊1
福田　武彦	非常勤助教	泌尿器外科学	
武井　航平	助　教	泌尿器外科学	＊1
戸倉　祐未	助　教	泌尿器外科学	＊1
植松　稔貫	助　教	泌尿器外科学	＊1
国分　英利	助　教	泌尿器外科学	＊1

氏名	職名	専門分野	専門医
大久保尚弥	助　教	泌尿器外科学	＊1
倉科　凌	助　教	泌尿器外科学	＊1
岡﨑　明仁	助　教	泌尿器外科学	
古藤野茉莉子	レジデント	泌尿器外科学	
稲葉　咲葵	レジデント	泌尿器外科学	
窪田　晴香	レジデント	泌尿器外科学	
藤田　素輝	レジデント	泌尿器外科学	

＊各医師の担当曜日等は、別紙「外来曜日別診療医一覧表」でご確認ください

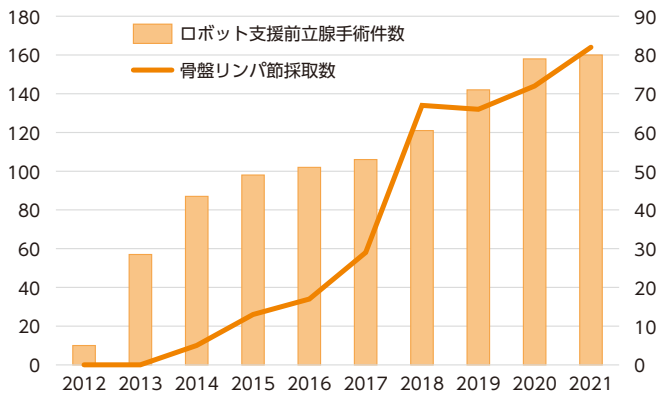
＊1：一般社団法人　日本泌尿器科学会　泌尿器科専門医

□ 地域連携

主要5大癌にならんで地域連携クリニカルパス導入も考慮しており、そのための県、郡市医師会での懇話会開催や積極的な広報啓蒙活動を行っていく予定です。

□ 前立腺癌手術件数の推移

最近10年間の前立腺全摘手術件数の年次推移を図に示します。ロボット支援下手術を基本術式としていますが、広範な開腹手術既往があり腹腔内癒着が想定される場合、未治療脳動脈瘤がある場合、未治療緑内障のある場合は従来の開放手術を選択しています。開放手術であっても、ロボット支援手術と同等の手技内容で行っているため、諸成績はほぼ同じです。



ロボット支援前立腺全摘手術の年次推移

再生医療センター

センター長　佐久間理吏（さくままさし）
副センター長　釜井　隆男（かまい　たかお）
副センター長　清水　泰生（しみず　やすお）

外来受付電話番号　0282-86-1111（代表）　E-mail　saisei@dokkyomed.ac.jp
ホームページ　https://www.dokkyomed.ac.jp/hosp-m/department/consultation_organization/181
随時更新

□ 再生医療センター変遷

吉田謙一郎学長の発案で再生医療プロジェクトが発足後、平成24年4月「再生医療センター」が設立し初代センター長に井上晃男先生が就任されました。平成26年11月25日より再生医療等の安全性の確保等に関する法律（再生医療等安全性確保法）が施行され、当院再生医療センターも、再生医療センター運営委員会を組織し、特定細胞加工物製造許可申請書の届出・許可申請が受理されました。その後当センターでは脂肪組織由来幹細胞（ADRC）をはじめ、様々な細胞源を用いた再生医療を実施しております。

ADRCは骨髄幹細胞に比べ簡便かつ潤沢に細胞を摂取でき、骨髄幹細胞同等の分化能、パラクライン効果を認める優れた再生細胞で、これを用いた再生医療に関して、当院では腹圧性尿失禁や重症虚血肢の治療に実績があります。保険診療ではありませんので、各専門分野で臨床治験や臨床研究として実施しております。泌尿器科では腹圧性尿失禁に対する治験を8例施行し、有効性、安全性を確認しております。また心臓・血管内科/循環器内科では重症虚血肢（閉塞性動脈硬化症、バージャー病、膠原病による末梢血管炎等）に対する血管新生療法として臨床試験に参加し、こちらも5例施行し有効性、安全性を確認しております。その結果、第2種再生医療として承認されました。また、第3種再生医療としてADRCを用いた乳房再建術の計画書も承認されております。

ADRC以外の細胞源を用いた再生医療として、口腔外科では多血小板血漿（PRP）を用いた顎骨・歯槽欠損に対する組織修復治療を自由診療として実施しております。また総合周産期母子医療センターでは新生児低酸素脳症に対する、自己臍帯血幹細胞（CD34陽性細胞）治療の臨床試験に参加しております。整形外科では変形性関節症や、スポーツ傷害（筋・腱・靭帯）を対象とした自家多血小板血漿（PRP）注入療法を自由診療として実施しております。

2019年からMuse細胞（Multilineage-differentiating stress enduring cell）を細胞源とした再生治療にも注目しております。Muse細胞は東北大学の出澤真理教授により発見されたストレス耐性の多能性幹細胞で、組織傷害に際し骨髄から末梢血を介し傷害部位に選択的に遊走し、自発的分化によって損傷細胞を置換・補充し修復する「生体内修復幹細胞」です。本学先端医科学研究センターでは出澤先生を本学特任教授としてお招きし、Muse細胞に関する基礎的研究をすすめていますが、当センターとして、Muse細胞を用いた再生治療の臨床治験に参加しております。急性心筋梗塞の治験9例と脊髄損傷の治験1例、COVID-19重症肺炎の治験4症例を実施しました。

随時当院再生医療センターで実施可能な臨床研究・治験・先進医療・自由診療・保険診療の情報提供をホームページ上に更新します。

□ 当再生医療センターで提供できる治療（2024.6.1現在）

- **顎骨再生**：口腔外科では多血小板血漿（PRP）を用いた顎骨・歯槽欠損に対する組織修復治療を自由診療として実施しています。
- **新生児低酸素脳症に対する、自己臍帯血幹細胞（CD34陽性細胞）治療**：総合周産期母子医療センターでは新生児低酸素脳症に対する、自己臍帯血幹細胞（CD34陽性細胞）治療の臨床試験を実施しています。
- **膝軟骨再生医療**：整形外科では膝関節における外傷性軟骨損傷または離断性骨軟骨炎に対する自己軟骨細胞シートによる軟骨再生治療の認定施設となっており、保険診療として実施しております。
- **変形性関節症・スポーツ障害**：整形外科では変形性関節症やスポーツ傷害（筋・腱・靭帯）を対象とした、自家多血小板血漿（PRP）注入療法を自由診療として実施しております。
- **重症下肢虚血による足趾潰瘍**：心臓・血管内科/循環器内科では重症下肢虚血による足趾潰瘍に対するHGF遺伝子治療の認定施設となっており、保険診療として実施しております。また、ADRCを用いた重症下肢虚血に対する血管新生療法も自由診療として実施しています。
- **軟部組織の再建**：形成外科・美容外科ではADRCを用いた乳房再建術を自由診療として実施しています。
- **クローン病による複雑痔瘻**：下部消化管外科（一般外科）では、非活動期または軽症の活動期クローン病による複雑痔瘻に対するヒト体性幹細胞加工製品の認定施設となっており、保険診療として実施しております。

□ ご紹介くださる先生方へ

当センターで提供可能な再生医療は前述のとおりです。対象となりうる患者さんがいらっしゃいましたら是非ともご紹介ください。いずれの場合も入院・精査の上、適応を確認してからの治療になることをご了解ください。また連絡窓口は当センター事務員が担当しております。詳細につきましては各治療実施責任者に確認後改めましてご連絡いたします。

□ 再生医療センターメンバー

顧　問	吉田謙一郎	学長
	井上　晃男	特任教授
施設管理者 病院長	麻生　好正	内科学（内分泌代謝）　教授
品質管理部門	佐久間理吏	内科学（心臓・血管）教授
製造管理部門	清水　泰生	内科学（呼吸器・アレルギー）　教授
衛生管理部門	水島　恒和	外科学（下部消化管）　教授
メンバー		
青木　　琢	外科学（肝・胆・膵）　教授	
飯田　拓也	形成外科学　教授	
井川　　健	皮膚科学　教授	
石塚　　満	外科学（下部消化管）　准教授	
井上　健一	先端医科学研究センター　准教授	
井上　陽晶	薬剤部	
岩畔　英樹	非常勤講師	
梅川　浩平	形成外科学　講師	
瓜田　　淳	整形外科学　講師	
小尾正太郎	先端医科学研究センター　准教授	
釜井　隆男	泌尿器科学　教授	
川又　　均	口腔外科学　教授	
鈴木　達也	リプロダクションセンター　センター長	
富沢　一生	整形外科学　講師	
豊田　　茂	内科学（心臓・血管）教授	
中村　祐介	内科学（呼吸器・アレルギー）　助教	
永瀬　　直	臨床研究管理センター	
成瀬　勝彦	産科婦人科学　教授	
橋本　涼太	内科学（心臓・血管）　助教	
濱口　眞輔	麻酔科学　教授	
福田　宏嗣	心臓・血管外科学　教授	
増渕　真澄	手術部（材料部）　師長	
八木沢就真	口腔外科学　助教	
山口　剛史	臨床工学部　技師長	
（50音順）		
事務担当	海老原充生	
	小比類巻歩	
CRC担当	大森　敦子	

放射線治療センター

センター長　江島（えじま）　泰生（やすお）

外来受付電話番号　0282-87-2178

□ 診療内容

放射線治療センターでは主に悪性腫瘍の治療を行っています。外来診療では、新規患者さん（他診療科または他院からの紹介）の診察、放射線治療中の診察、および治療後の経過観察を行います。治療方針決定に際しては、紹介元の主治医および関連診療科と相談・連携をして最善の治療法を提供出来るように努めています。なお、当センターは入院ベッドがないため、他院からの紹介患者さんで特に入院が必要な場合は、必ず先に関連診療科への紹介が必要となります。年間の新規患者数は約400-500名です。スタッフは専従医師３名、非常勤医師２名、医学物理士２名、診療放射線技師８名、専従医師３名、看護師３名、事務２名から成ります。リニアックによる外部照射の他、高精度放射線治療としては、孤立性肺癌を始め、脳転移、脊椎転移、オリゴ転移などに対する体幹部定位放射線治療（Stereotactic body radiotherapy: SBRT）、主に頭頸部癌と前立腺癌を始め、限局性の癌に対する強度変調放射線治療（Intensity-modulated radiation therapy: IMRT）を行っております。また、子宮頸癌に対する画像誘導小線源治療（Image-guided brachytherapy: IGBT）や、前立腺癌に対する高線量率組織内照射を行っています。なお、連携病院の医師による粒子線治療に関する専門外来も開設しています（要予約。治療は連携病院で行います）。

□ 特徴・特色

放射線治療の対象疾患は幅広く、あらゆる種類および進行度の悪性腫瘍に対して、根治的または緩和的に治療を行うことが出来ます。根治的には、放射線単独あるいは薬物療法と組み合わせて治療を行います。特に頭頸部癌、食道癌、子宮頸癌、前立腺癌、膀胱癌、皮膚癌、悪性リンパ腫などでは、臓器を温存して根治を目指すことが可能です。手術の補助療法として術前または術後に放射線治療を行うこともあります。緩和的な例としては、骨転移の除痛・骨折予防・神経圧迫の除圧、脳転移の症状改善、気道狭窄の解除、腫瘍出血の止血など、最小限の副作用で症状を和らげることができます。

高精度放射線治療では、治癒率の向上と共に、有害事象の少ない治療を目指しています。高精度放射線治療には前述のSBRT、IMRT、IGBTなどがあります。早期肺癌のSBRTでは、病巣のみに集中して最短で４回/４日間（通常照射では30～35回/６～７週間）の照射を行い、高齢・合併症などで手術に向かない患者さんでも安全かつ手術に匹敵する高い治療効果が期待できます。前立腺癌のIMRTでは、直腸・膀胱にあたる線量を制御しつつ、病巣に対してはより高線量を投与することが可能で、通常照射よりも治療成績の向上が期待できます。子宮頸癌に対するIGRTは、従来の腔内照射という照射方法において、CTとMRIを用いて治療計画を行っています。従来法よりも正確に腫瘍・腸管・膀胱の照射線量が把握できるため、安全かつ効果的に治療を行うことが出来ます。

これらの高度な放射線治療を安全に提供できるよう、スタッフが総力を挙げて取り組んでいます。専門資格のある医学物理士・品質管理士・放射線治療専門技師が中心となって患者さん毎の治療計画の検証作業、治療機器の安全・精度管理を行い、また、放射線治療専従の看護師を中心に、患者さんの治療介助、説明、日々の問診、看護ケアを行っています。医師を含め、これらスタッフが常に協力・連携して対応できるよう心がけています。

□ 主な医療設備

リニアック（高エネルギーエックス線治療装置）：
　Elekta社 Versa HD　２台
密封小線源治療装置：
　Nucletron社 マイクロセレクトロンHDR-V3　１台
　脳定位放射線治療装置：Elekta社 ガンマナイフ
治療計画装置：
　日立Pinnacle　４台、RayStation　２台
　Elekta社 Monaco　１台、
　Nucletron社 Oncentra　１台
治療計画用CT：
　キヤノンメディカルシステムズ社Aquilion LB　１台
治療計画用MRI：
　キヤノンメディカルシステムズ社VantageOrian　１台

□ スタッフ

氏名	職名	専門医	主な専門領域
江島（えじま）　泰生（やすお）	教授・センター長	放射線治療専門医・がん治療認定医	放射線治療全般、造血器腫瘍
小西（こにし）　圭（けい）	助　教	放射線科専門医	放射線治療全般
佐々木（ささき）理栄（りえ）	助　教		放射線治療全般
村上（むらかみ）　昌雄（まさお）	特任教授（非常勤）	放射線治療専門医	粒子線治療
田口（たぐち）　千藏（せんぞう）	非常勤	放射線治療専門医	放射線治療全般

医学物理士2名、診療放射線技師8名、看護師3名、事務2名

□ 診療体制

月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
江　島 小　西	江　島 村　上 （粒子線外来、第2,4週、要予約） 佐々木	小　西 江　島 （PMのみ） 佐々木	小　西 田　口（非常勤） 江　島 （PMのみ） 佐々木	江　島 小　西 佐々木	機器メンテナンスのため休診

血液浄化センター

センター長　藤乗（とうじょう）　嗣泰（あきひろ）

外来受付電話番号　0282-87-2182

□ 診療内容

●慢性腎不全・急性腎不全に対する血液透析および腹膜透析
●自己免疫疾患、神経筋疾患（重症筋無力症、慢性炎症性脱髄性多発神経炎、ギランバレー症候群）、劇症肝炎･肝不全、類天疱瘡、血管炎に対する血漿交換
●免疫吸着療法（SLE, 悪性関節リウマチなど）
●LDL吸着療法（家族性高コレステロール血症・巣状糸球体硬化症・閉塞性動脈硬化症）、直接血液吸着（DHP）
●顆粒球吸着療法（過敏性大腸炎,クローン病など）
●薬物中毒に対する血液浄化療法
●腹水濾過濃縮再静注療法（CART）
●シャントトラブルに対するカテーテルインターベンション

□ 特徴・特色

●慢性腎臓病患者の血液透析（HD）導入や慢性維持透析患者の合併症治療中の維持透析を行なっています。
●急性腎不全・急性腎障害の治療、高カリウム血症、溢水・尿毒症肺などの緊急血液透析あるいは持続的血液濾過透析（CHDF）、難治性うっ血性心不全に対する限外濾過法（ECUM）を緊急時に対応しています。
●2023年度の慢性維持透析導入患者数は90件で、急性血液浄化療法を含めると141名の導入があり、関連透析施設と連携しています。
●透析室25床で、2023年に9,398回の血液浄化療法を行っています。
●血漿交換療法、選択的血漿交換療法、免疫吸着療法、顆粒球吸着療法、直接血液吸着療法を積極的に行っています。
●腹水濾過濃縮再静注療法（CART）を肝硬変や癌性腹膜炎の難治性腹水から細菌や細胞を除去し、アルブミン消失を防ぐ治療を行なっています。
●腹膜透析の導入および腹膜透析外来を行っています。

腹膜透析（PD）導入と管理

連続携行式腹膜透析（CAPD）あるいは夜間に機械が透析液を自動的に交換する自動腹膜透析（APD）の導入を行なっています。

腹膜透析外来

月曜日：高橋知里、原田慎也、海賀安希子
木曜日：佐藤由佳、内田麻友

経皮的バスキュラーアクセス拡張術（VAIVT）
200～250例/年

□ スタッフ

血液浄化センターに関与している腎臓・高血圧内科のスタッフ

氏名	職名	専門分野
頼（らい）　建光（たてみつ）	教　授	腎臓全般、総回診
藤乗（とうじょう）　嗣泰（あきひろ）	教　授	腎臓全般、腎炎・ネフローゼ、高血圧
本多（ほんだ）　勇晴（たけあき）	准教授	心臓超音波検査
平尾（ひらお）　潤（じゅん）	講　師	血液透析管理、AKI、CKD管理
内田（うちだ）　麻友（まゆ）	助　教	血液透析管理、腹膜透析管理
海賀（かいが）安希子（あきこ）	助　教	血液透析管理、AKI、CKD管理

氏名	職名	専門分野
佐藤（さとう）　由佳（ゆか）	助　教	血液透析管理、CKD管理
荒川（あらかわ）　春奈（はるな）	助　教	血液透析管理
高橋（たかはし）　知里（ちさと）	医　員	血液透析管理、AKI、CKD管理
原田（はらだ）　慎也（しんや）	医　員	血液透析管理、AKI、CKD管理
大平（おおひら）　健弘（たけひろ）	非常勤	腹膜透析手術、ブラッドアクセス管理
永瀬（ながせ）　秋彦（あきひこ）	非常勤	腹膜透析手術、ブラッドアクセス管理

脳卒中センター

センター長　竹川（たけかわ）　英宏（ひでひろ）

外来受付電話番号　0282-87-2198（脳神経内科外来）

□ 診療内容

当センターでは急性期脳卒中（脳梗塞、脳出血、一過性脳虚血発作、くも膜下出血）の疑いがある患者さんを少しでも早く診察、治療を開始するために、2018年4月に設置されました。

急性期脳卒中の初期対応や鑑別はもちろん行いますが、特に超急性期脳梗塞に対してrt-PAによる血栓溶解療法やカテーテルによる機械的血栓回収療法を行います。

□ 診療体制

当センターの専従医師は2名（脳神経内科兼務）ですが、数名の脳神経内科の医師が兼務として従事しています。超急性期脳卒中疑い患者さんが搬送された時は、脳卒中センター医師および脳神経内科の医師が救命救急センター・集中治療センター医師とともに初期対応にあたります。

脳梗塞の超急性期で治療が安全にできると判断した場合は、速やかにrt-PAによる血栓溶解療法を行います。またrt-PAの有効性が乏しい患者さん、rt-PAが出来ない患者さんで、適応があると判断した場合は、脳卒中センターまたは脳神経外科の医師によるカテーテルを用いた機械的血栓回収療法を施行しています。

脳出血の患者さんの場合は、脳神経外科とともに手術適応の判断を行います。また、くも膜下出血の患者さんは速やかに脳神経外科による治療を開始します。

脳卒中はいつ発症するかわかりません。このため、24時間、365日対応できるよう、脳卒中センター専用のPHSを用いて脳卒中センター医師、脳神経内科医師にいつでも連絡が取れる体制を整えています。

急性期脳卒中は入院治療が必要です。ご入院される病棟は脳卒中ケア・ユニット、救命救急センター・集中治療センター病棟、脳神経内科病棟、脳神経外科病棟などのうち、最も適切な病棟および診療科で入院治療を行います。

□ 治療および成績

2023年の急性期脳卒中（救命救急センター・集中治療センター単独治療例除）は553例で、内訳は虚血性脳卒中が400例、出血性脳卒中が150例、脳静脈閉塞症が3例でした。虚血性脳卒中は一過性脳虚血発作（画像陰性）が19例、ラクナ梗塞47例、branch atheromatous disease5例、アテローム血栓性脳梗塞/脳塞栓症70例、大動脈原性脳塞栓症9例、心房細動による心原性脳塞栓症120例、奇異性脳塞栓症15例、その他の心疾患による脳塞栓症23例、頚動脈・脳 動脈解離8例、大動脈解離5例、感染性心内膜炎7例、原因不明（複数の原因）・塞栓源不明21例、その他（がん、血液疾患など）51例と、様々な病型の虚血性脳卒中を診療しました。また、脳内出血は118例、くも膜下出血は32例でした。

2023年の脳梗塞に対する超急性期治療数（再灌流療法）は84例（rt-PA静注療法単独41例、機械的血栓回収療法単独24例、rt-PA静注療法と機械的血栓回収療法併用19例）でした。残念ながら当院搬送時にすでに大きな脳梗塞が見られ、治療による出血の危険が高く、通常の急性期治療となる患者さんもいらっしゃいましたが、7割以上の患者さんは再灌流療法で後遺症なし、またはごく軽度の後遺症のみ（日常生活制限なし）まで改善されました。症状などによっては発見から4.5時間以内にrt-PA静注療法が、発症から24時間以内に機械的血栓回収療法が施行できますが、一刻も早く治療を開始することが何より重要です。脳卒中が疑われたら1秒でも早くご連絡いただければと思います。

□ 特徴・特色

当センターには日本脳卒中学会認定脳卒中専門医・指導医、日本神経学会認定神経内科専門医・指導医、日本頭痛学会専門医・指導医、日本脳神経血管内治療学会専門医・指導医が勤務しています。脳卒中は様々な神経の症状が出現しますが、脳卒中以外の脳神経内科疾患の鑑別にも速やかに対応が可能です。加えて、一部の脳卒中は頭痛を訴えることがありますが、脳卒中以外の頭痛の鑑別にも専門医が力を発揮します。

また脳卒中の診療にはCTやMRI、シンチグラムなどの画像検査に加え、様々な超音波検査が行われます。当センターには日本超音波医学会の超音波専門医・指導医、日本脳神経超音波学会認定検査士も勤務しており、高度な超音波診断による速やかな脳梗塞の原因検索が可能です。

□ その他

当センターは基本的に救急対応のため外来診療は行っていません。平日、急性期脳卒中の疑いのある患者さんのご連絡は、脳神経内科外来までお願いいたします。脳神経内科外来より当センター医師にすぐに連絡が入るよう体制を整えています。

当センターには（一社）日本脳卒中学会の栃木県担当委員責任者、（公社）日本脳卒中協会の専務理事・同栃木県支部長が勤務しています。日本脳卒中協会栃木県支部、日本脳卒中学会の一次脳卒中センター、一次脳卒中センター・コア施設に加え、当院は「脳卒中・心臓病等総合支援センター」であり、診療、患者さん・ご家族の支援、相談、啓発など、様々な活動をしています。

糖尿病センター

センター長　薄井（うすい）　勲（いさお）

副センター長　飯嶋（いいじま）　寿江（としえ）

外来受付電話番号　0282-87-2196

□ 診療内容

糖尿病診療では医師のみならず、看護師・栄養士などのコメディカルスタッフとのチーム医療が欠かせません。また、三大合併症と呼ばれる網膜症・腎症・末梢神経障害など糖尿病に特徴的な合併症や、虚血性心疾患・脳卒中・閉塞性動脈硬化症・足壊疽など多彩な合併症に対する診療を専門とする部門との密接な連携が必要です。当センターは、これら関連部門および専門スタッフとの密接な連携をとりながら、包括的な糖尿病のチーム医療を実践するため、2018年5月に設置されました。

当センターを兼ねる内分泌代謝内科の外来では毎日4～5名の医師が糖尿病の診療にあたっており、年間約3,000人の糖尿病患者さんに受診いただいております。糖尿病センター設立後はそれまでと比べて地域よりご紹介いただく患者さんの数が増える傾向にあります。特に1型糖尿病や糖尿病合併妊娠、重症慢性合併症をお持ちの方など、専門的な治療を必要とする患者さんを積極的にご紹介いただいています。

一方病棟では、教育・血糖コントロールや合併症の治療目的等の入院診療を行っています。これまで年間1,000名弱（主科　約400名、兼科　約600名）の入院患者さんの診療実績があります。なかでも、ケトアシドーシスなど急性合併症に対する緊急入院を、栃木県内外から数多く受け入れています。

当センターの治療方針として、食事療法・運動療法を重視した上で、最新かつ最適な薬物療法の選択に努めています。特に糖尿病センター設立後は、インスリンポンプや持続血糖モニタリング（CGM）を使用される患者さんの数が増加しています。また、2019年4月からは管理栄養士による栄養指導の予約枠がそれまでの3倍になり、より適切な患者指導の実践が可能になりました。それを受けて、透析予防の指導を受ける患者さんの数も著しく増加しました。さらに、2019年9月からは、糖尿病合併症をまとめて評価する特殊外来「合併症外来」を新設しました。

糖尿病合併症の診断や治療には、眼科、腎臓・高血圧内科、心臓・血管・循環器内科、脳神経内科など関連診療科と密接な連携を持ち、診療にあたっています。これら関連診療科およびコメディカルスタッフとは定期的にミーティングを持ち、診療における問題点などを話し合っています。また、年2回メディカルスタッフ向けの講演会を開催し、最新の情報を得る機会を設けています。

□ 特徴・特色

特徴的な診療として、インスリン持続皮下注入（CSII＋SAP）療法の診療経験を多く持ち、1型および妊娠中の糖尿病患者さまを中心に良好な診療成績を得ています。また、持続血糖モニタリング（CGM）は、県内有数の導入数を持ちます。さらには、外来や病棟に体組成計（InBody）、内臓脂肪計（Dual scan）、動脈硬化検査機器（CAVI・ABI測定）、血管内皮検査機器（FMD、EndoPAT）を常備し、診療に役立てています。

「合併症外来」は、外来通院中の糖尿病患者さんの合併症をまとめて検査・評価する目的で設置されました。毎週水曜の午後、完全予約制で診療を行っています。当院通院中の患者さんばかりでなく、近隣のご施設に通院中の糖尿病患者さんも対象としています。

また、当院通院中の糖尿病患者さんの会（きすげ会）の活動に加え、1型糖尿病患者さんの支援を積極的に進めています。

□ スタッフと専門領域

日本糖尿病学会専門医　12名：麻生好正、薄井 勲、城島輝雄、飯嶋寿江、登丸琢也、櫻井慎太郎、相良匡昭、二井谷隆文、若松 翔、井上有威子、平尾菜々子、田沼 大

日本糖尿病学会指導医　5名：麻生好正、薄井 勲、城島輝雄、飯嶋寿江、登丸琢也

糖尿病認定看護師　2名、日本糖尿病療養指導士（CDE-J）14名、および関連診療科医師の協力を得て、包括的な診療にあたっています。

□ その他

糖尿病センターは、糖尿病診療に関する院内の連携と地域の病診連携を推進することを目標にしています。さらに充実した糖尿病の診療を提供していけるよう努力してまいります。

ロボット手術支援センター

センター長　水島（みずしま）　恒和（つねかず）

□ 設立の経緯

外科手術は病気の治療に大きな成果を上げることができますが、患者さんの体にメスを入れるということは体への負担となります。そのため、手術の安全性を向上させたり、手術侵襲を低減する技術が進んできています。当院では、2012年10月より前立腺がん手術に対してロボット支援手術を導入し、現在ではロボット２台体制で肺・心臓・消化器・泌尿器・婦人科領域で合計450件/年間の実績があります。病院全体としてロボット支援手術を更におし進めていくために、2018年6月に当センターを設立いたしました。

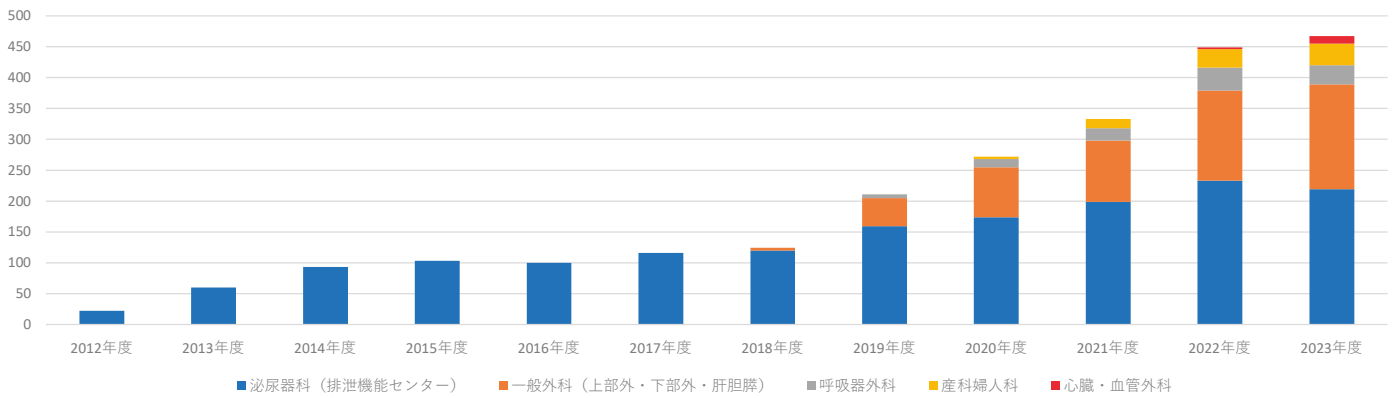
□ 診療内容

2024年４月時点で保険適応となる術式は、前立腺がん、腎臓がん部分切除、肺切除、縦隔腫瘍、食道がん、心臓弁形成、弁置換、胃切除、大腸切除、肝切除、膵切除、膀胱がん、子宮切除、膣断端挙上、咽喉頭悪性腫瘍などとなります。現在、泌尿器科、心臓・血管外科、上部消化管外科、下部消化管外科、肝・胆・膵外科、呼吸器外科、産科婦人科でロボット支援手術を開始しており、その他の各診療科においても準備が出来次第、順次開始する予定でいます。ロボット支援手術をご希望の方は、手術を受ける際に各診療科にお問合せください。

□ 今後の展望

現在のロボット支援手術はダビンチXiを用いていますが、各社の新しいロボット開発が進んでおり、今後さらに外科手術の概念が変わっていく可能性を秘めています。ロボット手術支援センターでは、最新式の機器導入を進め、最先端の医療を提供していきたいと考えています。

□ ダヴィンチ手術件数　年度別推移状況



スポーツ医学センター

センター長　種市（たねいち）　洋（ひろし）

外来受付電話番号　0282-87-2207

□ 特徴・特色

スポーツ医学センターは、トップアスリートからスポーツ愛好家までスポーツを行う全ての方を対象に医学的・科学的にサポートを行い、スポーツ医学領域の最先端の医療を提供するために2021年10月1日に開設されました。

スポーツ医学センターには、整形外科、外科、内科、リハビリテーション科など多くの診療科が参画しています。そのため、連携が取りやすく多角的にサポートすることが可能であり、スポーツ選手・愛好家に「迅速かつ最先端の医療」を提供できることが大きな特徴です。

□ 診療内容

当センターでは、スポーツに伴う全ての怪我および障害を診療いたします。また、メンタルに関する悩みについても対応いたします。

●対象疾患
膝靭帯・半月板損傷、外傷性軟骨損傷、足関節靭帯損傷、反復性肩関節脱臼、投球障害肩、野球肘、テニス肘、手関節捻挫、頭頸部顔面外傷、外傷性胸腹部損傷

□ 診療体制

診療時間　月-土曜 9:00～ 16:00（受付時間8:30～ 13:00）
プロ・アスリートは365日、24時間体制で対応しています。

診療方法
- ●当センターは紹介状の有無に関わらず診療いたしますが、持参いただかない場合は初診時選定療養費をご負担いただきますので、紹介状を持参いただくことをお勧めします。
- ●診療の問い合わせはスポーツ医学センター外来受付（整形外科）にお電話ください。
  受付電話　0282-87-2207（平日9:00-16:00）
- ●曜日によっては後日専門外来を受診していただく場合がありますので、事前にお問い合わせください。

□ 主な医療設備

- ●高気圧酸素療法：アスリートの障害を対象に行なっております。予約制ですので事前にお問い合わせください。
- ●多血小板血漿（PRP）治療：2023年10月から開始しました。アスリートの靭帯損傷や関節障害に対して行っています。

リプロダクションセンター

センター長　鈴木（すずき）　達也（たつや）

副センター長　木島（きじま）　敏樹（としき）

外来受付電話番号　0282-87-2242

□ 診療内容

リプロダクションセンターでは挙児を希望される患者さんに対する診療を担当します。具体的には以下の3つです。

・不妊症診療
・不育症診療
・がん・生殖医療

□ 特徴・特色

2015年に獨協医科大学埼玉医療センターにリプロダクションセンターが開設され、多くの患者さんが妊娠・出産されています。そして獨協医科大学病院にもリプロダクションセンターが開設され、2024年1月から診療を開始しました。

女性は年齢を重ねるごとに妊娠が難しくなっていきます。近年の晩婚化により不妊について心配されるご夫婦の割合は増加傾向です。また、不妊症の原因は男性側が約50%、女性側が約65%であり（重複あり）、女性側だけでなく男性側も診察し不妊症の原因を明らかにしたうえで治療を行うことが重要です。リプロダクションセンターは泌尿器科医と産婦人科医が協力し、短期間で妊娠していただけるよう診療いたします。

男性側の診療としては触診、超音波検査、精液やホルモン検査などを行います。精索静脈瘤手術や無精子症に対する顕微鏡下精巣精子採取法（MD-TESE）も行える体制を構築しています。

女性側の診療としては、タイミング療法や人工授精などの一般不妊治療と、採卵・胚移植といった生殖補助医療を行います。検査は超音波検査、ホルモンなどの血液検査、子宮卵管造影検査といったスクリーニング検査に加え、先進的な検査も行います。子宮筋腫や良性卵巣腫瘍がある場合、妊娠を考慮した治療方針を立て必要に応じ手術も行います。その他、他科疾患を合併している場合には各科と、また不妊治療後の妊娠に際しては産科と連携し診療いたします。

この他、妊娠はするが継続できない不育症の診療や、若年がん患者さんに対するがん治療前の妊孕性温存を目的とした精子や卵子、受精卵の凍結保存も行います。

□ スタッフと専門領域

氏名	職名	専門分野	専門医
鈴木（すずき）　達也（たつや）	教　授	女性不妊症	日本産科婦人科学会　産婦人科専門医・指導医 日本生殖医学会　生殖医療専門医・指導医 日本がん・生殖医療学会　がん・生殖医療ナビゲーター 栃木県医師会　母体保護法指定医 栃木県難病指定医（産婦人科）
木島（きじま）　敏樹（としき）	講　師	男性不妊症	日本泌尿器科学会　泌尿器科専門医・指導医
室井（むろい）　美樹（みき）	胚培養士	生殖補助医療	日本卵子学会　生殖補助医療胚培養士
髙橋（たかはし）　美紀（みき）	胚培養士	生殖補助医療	日本卵子学会　生殖補助医療胚培養士

○患者さんをご紹介いただく際の時注意事項について
＊原則、夫婦二人で受診して下さい。初診・再診ともに完全予約制です。
事前に下記電話番号までお問い合わせ下さい。（予約電話対応時間：14時～16時）
＊健康保険証（原本）・戸籍謄本・住民票・紹介状を必ず持参して下さい。

アレルギーセンター

□ アレルギーセンターについて

気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどのアレルギー疾患は、国民の２人に１人が罹患しているといわれており、アナフィラキシーショックなどの重篤な症状を引き起こすこともあります。

そして、アレルギー疾患の患者さんの多くは同時に複数のアレルギー疾患を患うため、症状も限局的なものから全身に渡るものなど様々です。

近年、検査法の進歩や新しい治療法の開発により、アレルギー疾患の診療内容も大きく変わり総合的な治療が望まれております。

このような現状を踏まえ、アレルギー疾患に対する高度で専門的な治療を提供するため、各診療科の垣根を超えた「アレルギーセンター」を平成30（2018）年８月に開設いたしました。当センターでは、関連する診療科の医師とコメディカルスタッフが緊密な連携を図りながら、患者さんに最適な治療を協力して提供いたします。

更に、平成30（2018）年10月１日付で栃木県から「アレルギー疾患医療拠点病院」の指定を受け、アレルギー疾患に対する診療連携体制の構築や人材育成等、地域の医療機関や患者会等とも連携しながらより良いアレルギー治療の提供体制を確立するとともに、アレルギー疾患に関する情報の発信を行って参ります。

□ 受診方法

15歳以下の患者さんについては小児科外来が窓口となりますが、16歳以上の患者さんについては、症状に応じて各診療科外来が窓口となります。

（15歳以下の患者さん）

小児科	TEL:0282-87-2201

（16歳以上の患者さん）

呼吸器・アレルギー内科	TEL:0282-87-2197
皮膚科	TEL:0282-87-2200
リウマチ・膠原病内科	TEL:0282-87-2506
総合診療科	TEL:0282-87-2054
麻酔科	TEL:0282-87-2213
耳鼻咽喉・頭頸部外科	TEL:0282-87-2210
眼科	TEL:0282-87-2209
口腔外科	TEL:0282-87-2212

□ 各科における対象疾患一覧

診療科	対象疾患
小児科	小児アレルギー疾患（気管支喘息、食物アレルギー、アナフィラキシー、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎（花粉症を含む）、口腔アレルギー症候群、アレルギー性結膜炎、ハチアレルギー　他）
呼吸器・アレルギー内科	喘息、花粉症、食物アレルギー、ハチアレルギー、アナフィラキシーショック、薬剤アレルギー
皮膚科	アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、薬疹、膠原病、その他皮膚アレルギー疾患
リウマチ・膠原病内科	膠原病及び類似疾患、好酸球増多症
総合診療科	アナフィラキシー及び緊急を要するアレルギー性疾患及びアレルギー性疾患も疑われる症例
麻酔科	周術期のアナフィラキシー
耳鼻咽喉・頭頸部外科	好酸球性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎、好酸球性中耳炎、喉頭アレルギー、花粉症
眼科	眼瞼炎、結膜炎、春期カタル、角膜潰瘍、白内障、網膜剥離など
口腔外科	口腔粘膜関連疾患（pollen-food allergy syndrome（PFAS）、口腔扁平苔癬関連疾患）、口腔金属アレルギー

センター長　吉原　重美

副センター長　井川　健

副センター長　中山　次久

外来受付電話番号　0282-86-1111（代表）

□ スタッフと対象疾患一覧

担当科	氏名	職名	対象疾患
小児科	吉原　重美	特任教授	小児アレルギー疾患（気管支喘息、食物アレルギー、アナフィラキシー、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎（花粉症を含む）、口腔アレルギー症候群、アレルギー性結膜炎、ハチアレルギー他）
	福島啓太郎	講　師	
	加藤　正也	講　師	
	宮本　学	講　師	
	藤田　雄治	講　師	
	中山　元子	助　教	
	梶谷さゆり	助　教	
	中山　幸量	助　教	
	吉原　伸弥	助　教	
	湯浅　尚紀	助　教	
	土屋　喬義	非常勤講師	
	菅野　訓子	非常勤講師	
	福田　啓伸	非常勤講師	
	安藤　裕輔	非常勤講師	
	阿部　利夫	非常勤助教	
	髙柳　文貴	非常勤助教	
	寺師　義英	非常勤助教	
呼吸器・アレルギー内科	仁保　誠治	教　授	成人アレルギー疾患（喘息、花粉症、食物アレルギー、ハチアレルギー、アナフィラキシーショック、薬剤アレルギー）
	清水　泰生	教　授	
	武政　聡浩	准教授	
	新井　良	講　師	
	池田　直哉	助　教	
	曽田　紗世	助　教	
	奥冨　泰明	助　教	
	奥冨　朋子	助　教	
	中村　祐介	助　教	
	丁　倫奈	助　教	
	内田　信彦	助　教	
	清水　悠佳	助　教	
	塚田　梓	助　教	
	塚田　伸彦	助　教	
	矢澤　那奈	助　教	
	吉田　亘輝	助　教	

＊各医師の担当曜日等は、別紙「外来曜日別診療医一覧表」でご確認ください

担当科	氏名	職名	対象疾患
皮膚科	井川　健	教　授	アトピー性皮膚炎、蕁麻疹、薬疹、その他皮膚アレルギー疾患
	林　周次郎	准教授	皮膚アレルギー疾患一般
	野老　翔雲	講　師	アトピー性皮膚炎
	石川　里子	助　教	皮膚アレルギー疾患一般
	神永　朋子	助　教	皮膚アレルギー疾患一般、薬疹
	手束　友紀	助　教	皮膚アレルギー疾患一般
	池上　徹栄	助　教	アトピー性皮膚炎
	森　智史	助　教	皮膚アレルギー疾患一般
リウマチ・膠原病内科	池田　啓	教　授	膠原病及び類似疾患 好酸球増多症
	有馬　雅史	教　授	
	倉沢　和宏	特任教授	
	前澤　玲華	准教授	
	新井　聡子	講　師	
	田中　彩絵	助　教	
	宮尾　智之	助　教	
	菊地　梓	助　教	
	長谷川杏奈	助　教	
	檜山　知佳	助　教	
	吉田　雄飛	助　教	
	相澤　有紀	助　教	
総合診療科	志水　太郎	教　授	アナフィラキシー及び緊急を要するアレルギー性疾患及びアレルギー性疾患も疑われる症例
	廣澤　孝信	講　師	アナフィラキシー及び緊急を要するアレルギー性疾患及びアレルギー性疾患も疑われる症例
麻酔科	髙橋　良享	講　師	周術期のアナフィラキシー
耳鼻咽喉・頭頸部外科	中山　次久	教　授	好酸球性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎
	今野　渉	講　師	アレルギー性鼻炎
	柏木　隆志	講　師	好酸球性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎
	常見　泰弘	助　教	好酸球性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎
	阿久津　誠	助　教	好酸球性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎
眼科	外来担当医		眼瞼炎、結膜炎、春期カタル、角膜潰瘍、白内障、網膜剥離など
口腔外科	外来担当医		口腔粘膜関連疾患 ・pollen-food allergy syndrome（PFAS） ・口腔扁平苔癬関連疾患 ・口腔金属アレルギー

放射線部

部長　曽我（そが）　茂義（しげよし）
技師長　杉岡（すぎおか）　芳明（よしあき）
看護師長　生井（なまい）　郁子（いくこ）

外来受付電話番号　0282-87-2177

□ 主な業務

放射線部は病院の中央部門であり、各診療科からの依頼で業務を行います。放射線科医、診療放射線技師、看護師、事務員で構成されており、曽我茂義放射線科教授が部長を兼務しています。診療放射線技師の業務は、装置と技術を駆使して、正確な診断や治療のための画像検査を行ったり、医学的知識に基づいて診療に役立つ画像を作成すること。また放射線治療において病変部に正確な照射ができるようにすることです。看護師は、放射線部で行われる検査の介助や、患者さんの様子を観察し安全に検査が行えるよう配慮しています。

事務部門は、受付で患者さんの応対や検査の予約の受付などに当たっており、放射線科医による画像診断報告書作成の補助も行っています。

放射線部を診療内容から分けると、放射線診断部門、血管造影部門、核医学部門、放射線治療部門の四部門となります。

放射線診断部門は、本館２階中央放射線部、内視鏡部、泌尿器科分室、新棟１階救急部、教育医療棟１階MRI室に分かれており、手術室および各病棟における放射線検査についても放射線部の管理下にあります。放射線部所属の診療放射線技師が診療各科の医師の依頼に基づいて撮影業務を行います。出来上がった画像は放射線科医が読影して報告書を作成します。また画像診断やカテーテルの技術を用いたIVR（画像ガイド下治療）、心臓や脳など様々な疾患のカテーテル治療も多数行われています。

核医学部門はRI棟２階にあり、検査に用いる放射性医薬品を医師により注射された後、患者さんの体内から発生する放射線をガンマカメラという特殊な装置で計測し、コンピュータを用いて画像を作ります。その画像を放射線科医が読影して報告書を作成し、担当医へ報告しています。

放射線治療部門は、RI棟１階にあり、放射線治療専門医が外来診療に当たっています。他科や他院から依頼を受けた患者さんに、コンピュータを用いて治療計画を行い、高エネルギー放射線発生装置（リニアック）と密封小線源治療装置（RALS）を用いて、治療を行っています。他にガンマナイフと呼ばれる脳定位放射線治療装置が設置されており、脳神経外科医と連携し治療を行っています。

□ 主な医療施設

高度先進医療を行う大学病院の中央部門として、常に質の高い画像や検査・治療を提供することを目指しています。

放射線診断部門については、最新の磁気共鳴装置（MRI）5台（1.5装置２台、3T装置３台）、エックス線コンピュータ断層撮影装置（CT）4台（320列CT1台を含む）、血管造影装置５台（うち１台ハイブリッド手術室、うち１台IVR-CT室）、エックス線透視装置６台、骨塩定量装置１台の他、一般撮影装置や特殊撮影装置を配備しており、全ての画像がデジタル化されサーバーに保存されています。特殊撮影装置には、乳房撮影装置、歯科撮影装置、長尺撮影装置などがあります。乳房撮影装置は3D対応で回転して撮影可能なため微小石灰化の分布も捉えやすくなります。歯科撮影装置はコーンビームCT対応であり、歯の周囲を詳細に診断可能です。当院は、全国的にも充実した設備を有する大学病院の一つと数えられています。年間検査人数は、エックス線撮影が131,014人、造影検査が10,168人、エックス線CT検査が48,953人、MRI検査が18,871人でした。

核医学部門については、ガンマカメラが３台配備されており、年間検査人数は1,992人でした。

放射線治療部門については、高線量率小線源治療（RALS）、ガンマナイフ（2023年４月更新、新装置稼働）リニアック装置２台が配備されており、年間新規患者数683人、延べ患者数は13,811人でした。（2023年度集計）

病理部

部長　石田（いしだ）　和之（かずゆき）

技師長　石川美保子（いしかわみほこ）

外来受付電話番号　0282-87-2180

□ 診療内容

病理診断は診療のいわば羅針盤であり、良質な医療を提供するためには質の高い病理部門の存在が必要不可欠です。病理部では、病理診断を行うための組織標本と細胞標本を作製します。組織標本は病理診断科にて専任の病理専門医が検鏡し組織診断を行います。細胞標本は国家資格を有する細胞検査士がスクリーニングし、専任の細胞診専門医が細胞診断を行います。

炎症性疾患や変性疾患、代謝疾患、循環器疾患など様々な疾患が病理診断の対象となりますが、病理診断が最も威力を発揮するのは悪性腫瘍の確定診断です。主治医は病理診断に基づき、患者さんの治療方針を決定します。

また、治療の甲斐なく不幸にして亡くなられた患者さんの診断の適否、治療の有効性の評価、思わぬ合併症や見落としの有無を検証するための病理解剖も病理部で行われます。

□ 特徴・特色

○　適切で高品質な組織・細胞標本の迅速な作製、厳密な標本管理と情報管理（2021年7月、ISO15189取得）
○　熟練の細胞検査士と細胞診専門医による細胞診断（各々ダブルチェック体制）
○　各種の免疫組織化学的検索（酵素抗体法、蛍光抗体法）と先進の遺伝子学的解析を取り入れた高度な技術
○　バイオハザード（感染症）対策がなされた剖検室
○　充実した電子顕微鏡室と超微形態診断

□ スタッフ

常勤13名（臨床検査技師11名、技術員2名）、非常勤4名（臨床検査技師3名、事務員1名）が業務にあたっています。病理部内でのローテーションによる個々人の能力とスキルアップのための系統的職業訓練体制を構築し、効率のよい業務体制を目指しており、積極的に各種資格の取得に挑戦しています。

○　資格（2024年4月現在）
細胞検査士　8名
国際細胞検査士　4名
認定病理検査技師　7名
二級病理検査技師　9名
有機溶剤作業主任者　5名
電子顕微鏡2級技師　1名
遺伝子分析科学認定士　2名
特定化学物質及び四アルキル鉛作業主任者　6名

□ 業務内容

円滑な病理診断（組織診断、細胞診断、術中迅速診断）および病理解剖を行うために、以下の業務を行っています。
○　組織診断、細胞診断、術中迅速診断の標本作製
○　細胞診のスクリーニング（悪性細胞・異常細胞の検出、疾患の推定など）
○　出張細胞診
○　免疫組織化学
○　電子顕微鏡標本作製および診断補助
○　遺伝子解析
○　病理解剖の介助
○　検体、パラフィンブロック、標本の管理
○　病理に関わる薬品の管理（ホルマリンなど）
○　病院における病理業務全般の精度管理

手術部

部　長　千田（ちだ）　雅之（まさゆき）
副部長　福田（ふくだ）　宏嗣（ひろつぐ）

外来受付電話番号　0282-87-2181

□ 特徴・特色

高度先端手術・近代設備が整った中で、麻酔科を主体として24時間体制で、あらゆる手術に対応しています。

手術部スタッフは、特定機能病院としての使命を果たすべく努力をしています。

□ 手術内容

当院の手術室は、定時手術を1日35件前後、そのほか緊急手術を24時間体制で受け入れています。2023年度の手術件数は9211件でした。

手術室は18室（2階手術室14部屋、1階手術室4部屋）あり、ハイブリッド手術室、ロボット支援手術室2室（内視鏡支援手術ロボット2台）、クリーンルーム、陰圧室を完備しています。

手術を行っている科は、消化器外科、小児外科、脳神経外科、心臓・血管外科、呼吸器外科、整形外科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉・頭頸部外科、産婦人科、口腔外科、皮膚科、形成外科･美容外科、乳腺センター、麻酔科（ペインクリニック）、心臓・血管内科/循環器内科、消化器内科、腎臓高血圧内科などです。

当院の手術室では、最新鋭の顕微鏡、内視鏡や手術支援用ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いた低侵襲かつ難易度の高い手術、ハイブリッド手術室を利用した血管内手術（弁置換術、ステント留置術、コイル塞栓術等）、院内に併設された総合周産期母子医療センターと協力した産科及び新生児手術、各種移植手術（生体肝移植、肺移植、膵・腎移植、角膜移植、骨髄移植など）などが行われ、実績を重ねています。患者さんの入院期間を短縮し、早期復帰へとつなげられることを目指しています。

□ 麻酔医

麻酔医は27名、うち16名が麻酔専門医です。

合併症の多い患者さん、リスクの高い患者さんの麻酔にも十分対応できる体制です。また、最新の治療に対応した麻酔管理が提供できるように積極的な活動を行っています。更に、各種神経ブロック、経静脈的自己調節鎮痛法（iv-PCA）などを用いて、積極的に手術後の痛みの緩和の取り組みを行っています。

□ 薬剤師

現在、10名の薬剤師を配置しています。手術室では一般薬、毒薬、麻薬などの適正使用の確認と管理をしています。また、腰椎麻酔の準備や無菌的ivPCAの準備や調整を行い、手術部をサポートできるよう業務拡大を図っています。

□ 看護体制

看護スタッフは2024年4月、看護師は76名、そのうち特定行為看護師は7名、看護補助1名。患者さんが24時間安全に手術を受けられることを目標に、知識、技術を習得するために勉強会、講習会を企画し学会や研究会などに積極的に参加しています。現在、特定行為看護師も活動の場を広げており、更に質の高い看護が提供できるよう人材育成に取り組んでおります。

□ 臨床工学技士

心臓・血管外科手術などに必要な人工心肺装置の操作（体外循環技術認定士6名）をはじめ自己血回収装置等のＭＥ機器に対応するために28名の臨床工学技士を配置し、当直体制により24時間の対応を行っております。

□ 放射線技師

手術部当番の技師を配置し、手術中レントゲン撮影や造影、ハイブリッド手術室業務など24時間の対応を行っております。

□ 安全管理

1）患者誤認防止のために、患者さんが手術室に入室の際はフルネームで名乗って頂き、担当の看護師が確認しています。
2）執刀に当たっては、執刀医が患者さんの名前、病名、術式を麻酔医や看護師に伝達し取り違えがないことを確認した後に手術を開始しています。
3）体内異物残存が発生しないため、タイムアウトを実践しています。
4）リストバンドを活用し、輸血に関する事故防止に努めています。
5）点滴を接続する際は、患者さんの名前を声に出し誤投薬を防止しています。

□ 目標

1）医療事故防止に努め患者さんが安心して手術が受けられる。
2）標準予防策を遵守し感染防止に努める。
3）患者さんが安心して手術に臨めるよう、環境を整える。

以上の目標を達成すべくスタッフ一同で努力しています。

時間外救急部

部　長　豊田（とよだ）　茂（しげる）

外来受付電話番号　0282-87-2199

□ 特徴・特色

時間外救急部は当院に救命救急センターが開設されたのを受けて設置されました。大学病院全科の協力のもとに、正規の診療時間を過ぎ時間外に受診される救急患者さん（重症患者さんは救命救急センターに依頼）の診療を当直医師が中心に迅速に行っています。

□ 診療概要

1．診療時間

月曜日～土曜日　16：30～翌日　8：30
日曜日・祝日・第3土曜日・年末年始・
開学記念日4／23
9：00～翌日　9：00

2．診療体制

① 大学病院の当直担当医師（内科系合同当直3名、外科系1～2名、小児科平日1名、土・日2名）が中心となって行っております。
② 紹介状持参で診療科が指定されている場合は当該科の当直または、宅直医が対応いたします。宅直もあるため受診前には必ず電話連絡をください。
③ 当院において特殊疾患で継続治療中の患者さんについては、当該科当直医師が診療する場合もあります。
④ 15歳以下（中学生まで）の小児については小児科当直医師が診療に当たります。
⑤ 脳神経外科、乳腺科、小児外科、口腔外科、皮膚科、放射線科、眼科、形成外科・美容外科、心臓・血管外科、呼吸器外科、耳鼻咽喉・頭頸部外科、精神神経科の診療は曜日によって宅直制となっております。
⑥ 精神神経科領域の初診患者さんについては疾患の性格上、診療の対象から除外されております。また、精神科医師は宅直制となっておりますので、対応できない場合があります。
⑦ その他救命救急センターから依頼された二次救急対象患者さんの診療を行っています。
⑧ その他のスタッフは看護師2～3名、事務員3名、放射線技師3名で行っています。

3．主な診療設備

〔診療施設〕
一般診療室：2室
処置室：1室
産科婦人科診察室：1室
小児科・内科診察室：2室
耳鼻科・口腔外科診察室：1室
眼科診察室：1室
点滴及び観察室：1室（小児2床・成人5床）
陰圧診察室：2室

〔検査室・機器〕
全身CT室：1室
X線撮影室：1室
超音波診断装置
心電図等診断機器
各種呼吸器循環モニター
耳鼻科内視鏡
眼科用スリット
電気的除細動

輸血部

部　長　今井（いまい）　陽一（よういち）

外来受付電話番号　0282-87-2187

□ 特徴・特色

1．安全で適正な輸血を推進する。
2．高度先進医療である造血幹細胞移植を強力にサポートする。
3．輸血専任臨床検査技師が24時間体制で輸血検査に対応する。
4．認定施設
　1）日本適合性認定協会　ISO15189認定
　2）日本輸血･細胞治療学会　認定医制度指定施設
　3）日本輸血･細胞治療学会　臨床輸血看護師制度指定研修施設
　4）日本輸血･細胞治療学会　認定輸血検査技師制度指定施設
　5）日本輸血･細胞治療学会　輸血機能評価認定制度(I&A制度)

□ 主な業務

1．輸血関連検査：血液型（ABO・Rhなど)、不規則抗体、交差適合試験
2．日赤血受注及び供給と管理：赤血球製剤、血小板製剤、新鮮凍結血漿製剤
3．日赤血の調整：洗浄、置換、分割操作、クリオプレシピテート製剤作製
4．自己血輸血：貯血式自己血採血及び管理、希釈式自己血、回収式自己血管理
5．造血幹細胞移植関連検査：CD34、CD3
6．造血幹細胞移植関連業務：血液型不適合骨髄移植時の血漿除去、血球除去、自己・同種末梢血幹細胞採取及び管理、臍帯血幹細胞の管理、ドナーリンパ球の採取

□ 構成人員

医師２名（兼任２名、日本輸血･細胞治療学会認定医１名、細胞治療認定管理師１名、自己血輸血責任医師１名)、臨床検査技師10名（専任10名、日本輸血･細胞治療学会認定輸血検査技師６名、細胞治療認定管理師５名)、看護師２名（兼任２名、臨床輸血看護師２名、自己血輸血看護師２名、アフェレーシスナース１名)、事務員１名で構成される。

夜間休日は輸血専任臨床検査技師１名が宿日直により24時間体制で輸血検査に従事する。

□ 医療設備

血液型・不規則抗体・交差適合試験自動検査機器（オーソビジョン)、血液成分分離装置（スペクトラオプティア)、クームス検査用血球自動洗浄装置（Himac　MC405)、血液製剤保存庫、血液バッグ用大型遠心機、血小板保存用振盪機、コールドベンチ、超低温フリーザー（－150℃)、臍帯血保存用液体窒素槽、クリーンベンチ、BD FACSLyric™ フローサイトメーター、電子カルテシステム（富士通)、輸血部門システムBTDX2（オーソ)、血液製剤保存庫温度管理システム（CHINO)

□ 2022年度業務実績

日赤赤血球製剤	：	17,654単位
日赤血小板製剤	：	35,585単位
日赤凍結血漿製剤	：	11,716単位
自己保存血採血	：	231単位
末梢血幹細胞採取	：	28件
骨髄赤血球除去	：	2件
骨髄血漿洗浄	：	1件

□ 将来の展望

1．造血幹細胞の増殖（特に臍帯血造血幹細胞)
2．遺伝子治療、再生医療に向けた基礎的検討

遺伝・ゲノム診療部

部長　成瀬（なるせ）　勝彦（かつひこ）

外来受付電話番号　0282-86-1111（代表）

□ 遺伝カウンセリング外来について

最近の遺伝子解析技術の進歩と遺伝病に関する情報の蓄積には目覚ましいものがあり、以前はわからなかった遺伝病の原因が検査でわかる場合も増えてきました。遺伝病の中には、早くから対策することにより発病を遅らせたり、症状を軽くしたりできるものがあることがわかっており、患者さんご本人やご家族の病気が遺伝によるものなのか、というご質問も受けるようになりました。遺伝子検査の結果に関する問い合わせも増えています。当診療室は、ご本人やご家族の不安や悩みに寄り添いながら、遺伝に関する正確な情報提供を行い、ご本人やご家族が自らの力で問題解決の糸口を見つけだす手助けのために遺伝カウンセリング（完全予約制）を実施しております。

□ 受診時間

受診は完全予約制です。お申し込みいただいたのち、担当医師を決定のうえ、こちらから受診日をご連絡いたします。

(1) 成人疾患：ゲノム診断・臨床検査医学講座にご連絡ください（平日09:00 ～ 16:00）
(2) 小児疾患：小児科外来にご連絡ください。詳しくは獨協医科大学病院小児科臨床遺伝部門のHPをご覧ください。
https://dept.dokkyomed.ac.jp/dep-m/ped/specialty/inh.html
(3) 産婦人科疾患：産科婦人科外来にご連絡ください。受診日は火曜日または木曜日となります。
（新型出生前遺伝学的検査【NIPT】についても産婦人科外来にお問い合わせください）

※各分野ともメールでの事前相談も受け付けます。（診療は行いません）。アドレスはお問い合わせください。

□ 料金

遺伝カウンセリングは原則として自由診療で行います。（保険適用となる遺伝学的検査が実施される場合などによっては、保険診療となります。）
初診時10,000円（税抜き）
再診時30分　5,000 円（税抜き）
※以降は、30分毎に5,000円（税抜き）加算
カウンセリング終了後に会計でお支払いいただきます。
なお、お問い合わせ、ご予約には料金はかかりません。
当日までキャンセルも可能です。

□ 受診の対象となる方

主に以下のような疾患ですが、ご本人（妊娠中の出生前診断ではご夫婦・パートナー同伴）が受診されることを原則といたします。

なお、他医療機関から当院を受診の際には原則として紹介状が必要です。紹介状をお持ちでない方でも対応可能な場合もありますが、その場合、正確な情報提供や各診療科との連携が困難になる可能性があります。

1．成人疾患（小児・周産期を除く）

内分泌疾患：家族性甲状腺腫、先天性甲状腺機能低下症、甲状腺ホルモン不応症、家族性高カルシウム血症、ギッテルマン症候群、腎性尿崩症、家族性高HDL血症、カウデン症候群など
家族性腫瘍：遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）、リンチ症候群、多発性内分泌腫瘍症（MEN1、MEN2）など
結合組織性疾患：Marfan症候群、Ehlers-Danlos症候群など
神経・筋疾患：脊髄小脳変性症、Becker型筋ジストロフィーなど
循環器疾患：QT延長症候群、肥大型心筋症など
眼科疾患：網膜色素変性症など
ミトコンドリア病：MELASなど

2．小児疾患

数多くの染色体異常症や先天奇形症候群、皮膚疾患、骨系統疾患、神経筋疾患、眼科疾患、耳鼻科疾患、その他の先天性疾患について、専門的遺伝知識と経験をもとに検査および診断を行います。

また、個々の症例で遺伝カウンセリングを行うとともに、疾患の診断に基づく健康管理を定期的に行い、家族の相談に応じます。さらに、それぞれの疾患の合併症についての診療を、小児科の他部門および他科（外科・眼科・耳鼻科・皮膚科・整形外科・脳神経外科など）との連携の元で行います。

詳しくは獨協医科大学病院小児科臨床遺伝部門のHPをご覧ください。
https://dept.dokkyomed.ac.jp/dep-m/ped/specialty/inh.html

3．産科・婦人科（周産期、生殖、婦人科腫瘍）

21 ／ 18 ／ 13トリソミーなどの出生前診断、胎児疾患、習慣流産、原発性無月経、遺伝性腫瘍など。新型出生前遺伝学的検査【NIPT】の日本医学会認定施設です。